

加虐な少女達

くオムツのとれない私のせんせい

目次

第一章	私の方が背が高い登校
第二章	約束は守ってね
第三章	合宿所のおねえさん達
第四章	算数が解らない
第五章	オネショなんてしないもん
第六章	オムツをあてておきましょう
第七章	替えのオムツはどこにあるの
第八章	黒髪のお漏らしアリス
第九章	ほんとうのきもち

登場人物

三谷 弘夢	(みたに ひろむ)	男	20歳	大学生
吉野 碧衣	(よしの あおい)	女	×0歳	△学四年生
中原 千鶴	(なかはら ちづる)	女	20歳	大学生
倉島 彩加	(くらしま あやか)	女	×0歳	△学四年生
相川 香澄	(あいかわ かすみ)	女	×0歳	△学四年生
如月 理香	(きさらぎ りか)	女	××歳	□学生
春川 杏奈	(はるかわ あんな)	女	××歳	□学生
中川 詩織	(なかがわ しおり)	女	24歳	塾の事務員
倉科 曜子	(くらしな ようこ)	女	1×歳	旅館の従業員

第一章 私の方が背が高い

「ごめん下さい」

いつものように午後三時五十五分きっかりに、三谷弘夢は吉野家の玄関先に立っていた。

「あら先生、いらつしやいませ。いつもすいませんね」

暖かな微笑みを浮かべて彼を出迎えたのはこの屋敷の主婦三谷玲子だ。まだ三十代前半の彼女は年相応に若々しい服装で弘夢に軽く会釈する。

若い頃は相当な美人だったのだろう。それはかなり歳の離れたまだ大学生の弘夢でさえドキリとするような笑顔だ。玲子はスリッパを出して延内に弘夢を招き入れると、まだ少女つぼさの残る可愛らしい口調で二階に向かって声を出した。

「碧衣ちゃん、先生がいらつしやったわよ」

ほどなくして「はい」という母親に負けない可愛らしい声が返ってきた。弘夢は玲子夫人に軽く挨拶をして階段を上っていく。

大きな吹き抜けを囲むように配置された階段を二度曲がり、二階に上がってすぐの部屋が彼のアルバイト先だった。弘夢は少しだけ身支度を調べてからその部屋の扉をノックした。

「碧衣ちゃん、三谷です」

「どうぞ」

声とともに内側から扉が開かれた。

「先生、いらつしやい」

そう言って出迎えたのはまだ小さな少女だ。フリルのついた真っ白いブラウスに水色のミニスカート姿の彼女はどこか若い頃の玲子夫人を彷彿とさせる。少女はこれ以上ないくらい優雅な身振りで弘夢を部屋に招き入れた。

子供部屋にしては広すぎる畳ほどの室内は相変わらず乙女チックに彩られている。レースたつぷりのピンク色のカーテンにパステルカラーで統一された家具達。本棚は女の子向けの児童書とほんの少しの少女漫画が整然と並び、窓際のチェストには所狭しと人形や縫いぐるみが飾られている。

女の子の部屋といえは、まだここにしか入った事の無い弘夢はいつもの事ながらその雰囲気圧倒された。

「どうぞ、先生」

この部屋の主、家庭教師である弘夢の教え子の吉野碧衣は彼用に用意された椅子を差し出した。

「ありがとう」

生真面目な彼は歳の離れた少女にも頭を下げてそこに腰を掛けた。本来ならば少しの世間話や冗談でも言ってから授業を始めるべきなのだが弘夢にはそんな余裕は無い。彼は無言で鞆に手を突っ込むと、碧衣の為の教材を勉強机の上に広げ始めた。

「えっと、先週は過去形のところまでだったね。じゃあ復習から始めようか」
現役文系大学生である弘夢が碧衣に教えているのは英語と国語だった。それなりに有名な私立大学に通っている彼はひよんな事からこのアルバイトを紹介されたのだ。

「はい先生」

不満一つなさげにそう言うと、碧衣は素直に勉強机の前に座った。急接近した碧衣の体からは、まだあどけないながらも仄かに女性の香りがして弘夢を少し緊張させる。

「じゃ、じゃあこれを訳してくれるかな『グリーンさんは昨日、ピアノを弾いた』」

弘夢が問題集を指さすと、碧衣は手に鉛筆を持ってノートに向かった。

「ええっと・・・グリーンさんはだから・・・Green play the piano・・・」

「playだっけ？」

「あつ、そうそう。過去形になるんだよね・・・たしか played。」

「うん、正解」

弘夢の言葉に碧衣は本当に嬉しそうな表情をしてノートにペンを走らせる。こんな時の弘夢は教えることが本当に楽しくて仕方なかった。

『ずっとこんな風だといんだけど・・・』

だが彼が心の中でそんな事を夢想した瞬間、二人の楽しい時を打ち壊すかのようには部屋の扉がノックされた。

「どうぞ」

相手が分かっているながらも碧衣が言った。

「あら、もう授業始めて下さってるんですか？」

入ってきたのはもちろん玲子だ。手には紅茶とお菓子の乗ったトレイを持っている。

「お勉強の邪魔をして申し訳ありませんけど、よろしかったら一休みして下さい」

「あ、ありがとうございます」

弘夢は深々と頭を下げたが、正直いつもの事ながら玲子のこの気遣いは彼には

不満だった。勉強を教えるだけならともかく、歳の離れた女の子と日常会話を
する事に彼は慣れていなかったのだ。そして彼がそれを嫌うにはもう一つ重大
な理由があった。

「じゃあママお買い物に出かけるから、先生の言うことを聞いてお留守番して
おいてね」

碧衣は「うん分かった」と大きな声で返事をして母親に手を振った。玲子夫人
は再び弘夢に礼を言ってから部屋を出て行く。

「さっ、先生食べようよ」

だがその扉が閉まってから彼女は豹変した。

「あーあ、またいつもと同じお菓子じゃん。ママっては何度言っても分かんない
んだから・・・ほら先生も食べなよ」

彼女は小袋入りのお菓子を一つつかむと、まだ勉強机のそばの椅子に座ったま
まの弘夢に向かって投げつけた。

「わっ！」

胸元に正確に投げられたお菓子だったが、反射神経も運動神経も人一倍鈍い弘
夢は慌てたあげくそれを取りこぼしてしまった。

「あははは、先生相変わらず鈍いよね」

スカート姿のままカーペットにあぐらをかいた碧衣は大きな声で笑った。その
まるで男の子のような仕草に先ほどまでのお嬢様然とした面影は全く無い。弘
夢は「また始まってしまったか」と頭を振って椅子から立ち上がった。

碧衣が母親の前で猫をかぶっていると気がついたのは、二回目の授業に訪れた
時だった。

その時も玲子が急な用事で出かけ、その後彼女の様子が一変したのだ。碧衣は
隠すことも無く、『母親の前では「女の子の振り」をしているのに疲れる』と言
い切り、先生には本当の私の姿を見てもらいたいのと、まるで弘夢を誘うよう
な目つきで語ったのだった。

「こら、食べ物投げたりしちや駄目じゃないか」

ほんの少しばかりは威厳を保とうと弘夢は碧衣を叱りつけた。だがこうなって
しまった碧衣が手をつけられないほどのお転婆少女だと言うことを誰よりも弘
夢は知っていた。

「ねえねえ、先生。また背比べしようか？」

彼の想像通り、叱られている様子など微塵も感じさせず碧衣は立ち上がって弘
夢の正面に立つ。彼女が殊更背が高い訳では無いのだが、驚くべき事に二人の

身長は同じくらいだった。これが彼が女の子を苦手としている理由の一つなのだ。

忘れもしない碧衣と同じ△学四年生の時、不慮の交通事故にあつて以来弘夢の身長は止まったままだ。医者は脳下垂体の損傷による成長ホルモン分泌の異常だと説明してくれたが、その治療方法が無いこともまた力なく彼とその母親に語った。

幸いな事に見た目以外の成長は滞りなく、彼は無事に大学進学まで出来た訳だが、例えば制服を特注のサイズでオーダーしなければならなかったり、教室の机の高さをぎりぎりまで下げてもらわなければならぬ出来事は事あるごとに彼を苦しめた。

「私ね、今日の身体測定でまた背が伸びてたんだよ。背の順で並んだら後ろから七番目になっちゃったんだ」

そのあたりは年相応の可愛らしさで碧衣は自慢げに言った。彼女の語る通り、碧衣の身長は△学四年生女子として平均的なものだ。だがその彼女と背比べをさせられる弘夢の方はたまらない。大学生男子である身でありながら、△学生の子と成長を競わなければならないのだ。

「ほら、背中向けて立って」

弘夢の両肩を握った碧衣に対し、弘夢は不満そうに言った。

「駄目だ、まだ授業中だからね。遊びは終わってからだ」

その言葉に碧衣はニヤリと笑みを浮かべる。

「ははあん。先生怖いんだ、私に抜かれるのが」

「な、なにをっ？」

弘夢は思わず本気で口走ってしまった。確か一ヶ月前に測った時は弘夢の方がほんの少しだけ高かった筈だ。だが成長期の碧衣に対し、それを彼が恐れていたのも事実だった。

「先生嫌なんですよ。△学生の女の子に身長を抜かれるのが。今日もいたよ、男子の中で明らかに私より小さいのに、150センチあるもんなんという馬鹿な男の子がさ」

「そ、そんなことあるはずないだろ」

文字通り背伸びをしたがる△学生男子と一緒にされてはたまらない。弘夢は年上の意地とばかりに言い放った。

「じゃあ比べてみようじゃないか」

「望むところよ」

碧衣は不敵に笑う。

「だけど僕の方が高かったら今日から真面目に授業を受けること。分かった？」
大人として気の利いた事を言ったつもりで弘夢は碧衣の目を見据える。だが全く動じずに彼の教え子は言い返した。

「分かりました先生。だけど私の方が高かったら、一つだけ私の言うことを聞いてくれますか？」

「わ、わかった」

急に敬語に戻った碧衣の口調に嫌な予感を感じながらも、また馬鹿にされる事を恐れて弘夢は頷いてしまった。

「じゃあこっち来て背中向いて下さいね」

二人は部屋の壁に埋め込まれた姿見の前に立つと、お互いに背中を向けあった。女の子と体を密着するのは背比べとはいえ弘夢の心臓を高鳴らせる。だがその時、彼の心臓の動きを加速させていたのはそれだけの理由では無かった。

たしか新学期の時、碧衣は背の順で真ん中くらいだと言っていた筈だ。碧衣のクラスの女子は15人程度の筈だから、今日の結果で後ろから七番目ならそれほど伸びている筈も無い。弘夢はそう信じて鏡をのぞき見た。

「やったあつ！！」

その瞬間、鏡の中でそう叫ぶ碧衣の勝ち誇った顔が飛び込んで来た。

「えっ！？」

鏡の中の頭上を覗き見ると、確かに碧衣の頭の方がほんの少し抜き出ている。

「そ、そんな・・・これは何かの！？」

弘夢は慌てた。心の中ではいつか抜かれると思っていたが、やはり実際に△学生の教え子に背の高さで負けるというのはショックだった。だが足下を見ても碧衣が背伸びをしている様子も無く、いくら背筋を伸ばしてみてもその優劣は明らかだった。

「ねっ、凄いでしょ。実は私145越したんだよ」

「えっ！？そ、そんなに！？じゃあ・・・」

「うん、ゴメンね。実は後ろから七番って言うのはウソ。ホントは後ろから三番目になっちゃったんだ」

「そ、そんなに・・・」

まるでずっと同じクラスで競い合っていたクラスメイトのように弘夢は肩を落とした。それには彼しか分からない理由があり、145センチという壁は彼にとってトラウマとも呼べるべきものだったのだ。

それは忘れもしない事故前の△学四年生の頃、彼は学年でも目立つほどの大きな子供だった。子供の頃と言えば背の高さは大いなる自慢だから、彼もそれを誇りにして二期の身体測定に挑んだ。彼の学年ではまだ145センチを越した生徒は誰もいなかったし、夏休みに牛乳を飲みまくった彼はそれを越していることを祈って計測器の上に立った。

「144・8センチ」

保健室の先生の声が未だに彼は思い出す事が出来る。結果として彼はクラスで一番背の高い男子となったのだが、それ以上に衝撃的だったのが彼より背の高い女子が二人も現れてしまった事だった。△学生くらいでは女子の方が成長が早いのが当たり前だが、測定結果を自慢げに見せつける同級生の女子達に対し、彼は心の底から羨ましがり、そして追い抜いてやろうと決意した。すぐにでも145センチなんて追い抜いて、150センチも越してやるんだ。彼がそんな淡い将来の夢を見た矢先の事故だった。

「せ、せんせー、そんなに落ち込まないでよ」

もちろんそんな事情など何も知らない碧衣が彼の肩を叩いた。実際のところ彼女に悪気は無く、彼のそんな病気の事も、そしてもちろんトラウマの事など碧衣は知らない。

「ちっちゃい先生も可愛いよ。まるで弟みたいだし」

どこまで本気だか分からないが碧衣のそんな励ましは更に弘夢を辱めるだけだった。確かに身長と同じく、顔つきさえも△学生の頃から変化していない弘夢の姿は、見た目△学校四年生のままで。だが面と向かって△学生から弟みたいだと言われて慰められる筈も無かった。

「と、とにかく、背は抜かれたかも知れないけど僕の方が人生の先輩だと言うことは忘れないように」

このままずると落ち込めば家庭教師も辞めざるを得ない。容姿のせいではないかなか見つけられなかったアルバイトを手放すわけにもいかず、彼は気を取り直して精一杯の虚勢を張った。

「はい」

意外な事に碧衣は元気よくそう返事をした。

「おっ、意外に素直じゃないか」

笑顔を取り戻したように弘夢は微笑む。だが同じような笑顔を期待した彼に対し、碧衣はどこか冷たい笑みを浮かべて言った。

「でも先生、覚えてらっしゃいますよね。私の言うことを一っだけ聞いて下さ

るって」

お嬢様風の雰囲気を取り戻してそう言った彼女の口元を見て、弘夢は背筋の凍るような悪寒を覚えた。そして程なくその予感現実となるのである。

第二章 約束は守ってね

屈辱的な背比べから一ヶ月後、弘夢は自宅からほど近いJRの駅前に一人立っていた。

夏休みに入ったばかりだから早朝とはいえ学生の姿はそれほど見えない。それでも出社を急ぐサラリーマンやOLでゴった返すその場所で彼は大きいなる不安を胸に抱えて佇んでいた。

「先生！」

待ち合わせ時間に数分遅れて現れたのはもちろん碧衣である。何故か肩から大きな鞆を提げた彼女はいつものようにフリルのついた長袖のカットソーと、歩く度にふわふわと膨れあがる若草色のミニスカートといった愛らしい服装だ。碧衣は弘夢の姿を見つけると一目散に駆け寄ってきた。

「待った？」

「いや、今来たばかりだよ」

それはまるで恋人同士のような会話だったが、むろん二人はこれからデートに出かける訳では無い。碧衣は待ち合わせに遅れた事をほんの少しだけ謝罪してから弘夢の姿をじろじろと眺め見た。

「ふーん、先生ったら、普段はそんな格好してるんだ〜」

その口調には明らかに侮蔑の成分が込められていた。いつもの家庭教師用の大人っぽさを気取った服装と違い、今日の弘夢はまるで△学生のような格好だったからそれも無理は無かった。

「し、仕方ないだろう」

少しはかんで弘夢はいくつも年下の少女に反論しようとした。だが自分の体格では△学生サイズの洋服しか手に入れるのが難しいと必死に説明しても詮方ない。彼はそれを諦め、改めて碧衣に聞いた。だした。

「それで今日僕はどうすればいいんだい？」

一ヶ月前の賭の取り決め、一つだけ碧衣の言うことを何でも聞くという約束は今日行われる事になっていた。そのために弘夢は朝早くからこの場所に呼び出されたのだ。

「実はね、今日から私宿泊研修に行く事になってるの」

突拍子も無い話を碧衣は始める。

「それがさ、ママが勝手に申し込んだ一泊二日の旅行なんだけど、私今日は友達と約束しちゃってて、どうしてもそっちを優先したいんだ」

「それで？」

話は理解出来たがそんな事自分にどうしてやる事も出来ない。まさか参加しないで済むように一緒に母親に頭を下げてくれと言うわけでも無いだろう。弘夢は首を捻った。

「それでさあ、ちよつと言いくいんだけど・・・」

珍しく碧衣は口ごもった。その様子を見て弘夢は家庭教師の立場を思い返す。

「事情は分かっただけど、キミはまだ小さいんだからお母さんの言うことは聞かないといけないよ。嫌かも知れないけど友達には断りを入れて参加するしか無いんじゃないか？」

それを聞いた碧衣は少し不満そうな表情を浮かべた。

「なによ。私より小さいクセにお兄さんぶっちゃって。今日は先生私の言うことを何でも聞かなくちゃいけないのよ」

小さいとはもちろん年齢では無く身長のことだ。それを言われると弘夢はぐうの音も出ない。

「そ、それは・・・」

言い返すことの出来ない弘夢に満足したように頷いて碧衣は言った。

「一つだけ方法があるの。私が合宿に参加しなくて済む方法がね」

碧衣の表情に弘夢は途轍もなく嫌な予感を覚えた。

「き、聞かせてもらおうか」

「うん。よく見るとき、私と先生って似てると思わない？」

更に思いも掛けない話を碧衣は持ち出した。

「そ、そうかな？」

「うん、そうだよ。知っての通り身長は私が少し高いだけだし、髪の毛の長さも体格もそんなに変わらないじゃん」

確かに碧衣の言うとおりであった。可愛らしいヘアアクセで女の子らしくはなっているが、碧衣の髪は女の子としてはショートカットと言ってもよいくらいだ。おまけに二次性徴を迎えていない胸やお尻はまだそんなに出てもいないし、おそらくスリーサイズや体重も二人はそんなには変わらないだろう。

「それに先生って女の子っぽい顔つきだし、見ようによっては私達姉妹みたいに見えると思うんだ」

「そ、そんな馬鹿な！」

弘夢はそう言って否定したが、△学四年生のまま成長を止めてしまった彼の顔つきはまだあどけなく、母親譲りの優しい目元と相まって少年というよりも少女らしささえ感じられるものだった。

「ほら、こっち来てよ」

碧衣に手を引かれ、弘夢は駅ビルのショーウィンドーの前に並んで立った。今年流行の女性服が展示されたガラスの表面に映っているのは二人の少年少女。一人は本当は青年と呼べる年齢なのだが、どうみても年齢の変わらない姉弟にしか見えない。それどころか顔のパーツを見比べると確かに二人は双子の姉妹にさえ見えた。

「ねっ、驚いたでしょ。私も最近気がついたの」

目の前に証拠を突きつけられればもう言い返す事など出来なかった。20歳の大学生の自分が△学四年生の女の子とそっくりだなんて認めたくも無かったが、弘夢は渋々首を縦に振った。

「た、確かに少しは似てるかもしれないけど、さっきの話とそれとどういう関係があるんだよ」

「相変わらず鈍いわね先生」

碧衣は弘夢の目をじっと見る。彼女の方が目線が少し上なのが悔しい。

「じゃあ鈍い先生に教えてくれるかな」

子供っぽくそう言ってしまった弘夢に対し、碧衣は驚愕するような提案を口にした。

「うん教えてあげる・・・先生、私と入れ替わって合宿に参加してよ」

「えええっ!?!」

大きな声に通行人達が二人を振り返る。弘夢は咳払いしてから小さな声で言った。

「そ、それってどういう・・・」

「今私達がそっくりだって認めたじゃない。じゃあ私と入れ替わって合宿に参加しても大丈夫でしょ」

「だ、大丈夫って!?!」

「そうすれば私は友達との約束を破らなくて済むし、先生は教え子との固い約束を守るし一石二鳥でしょ?」

この間教えてあげたばかりの四字熟語を使って碧衣は言った。

「だ、駄目!いくらなんでも僕が碧衣ちゃんの代わりなんて出来るはずないよ!」

「そうかな?逆なら難しいかもしれないけど、大学生が△学生の振りするなんて簡単でしょ。引率してくれる先生と私は直接会った事もないし、先生は何も知らない無邪気な振りをしていればいいんだからさ」

どこか冷めた口調で碧衣は言った。

「それとも先生って教え子との約束も守れない嘘つきの大人なの?私そんな先

生に教えてもらおうのヤだな。ママに相談してみようかしら」

それは碧衣の切り札だった。大人びた彼女は弘夢にとって自分の家庭教師というアルバイトがいかに得難いものである事を熟知していたのだ。

「脅すつもりなのか？」

「別にそういう訳じゃないんだけど、ぎぶあんどてーくってやつ？」

「まったく、そんな言葉だけは知ってるんだな」

「他にも知ってるよ。ロリコンとかセクハラとか」

碧衣はニヤリと笑って言った。その単語がもう完全に弘夢を恫喝しているのは疑いようも無かった。これ以上断れば嘘や狂言も辞さないと言った彼女は暗に言っているのだ。

「この小悪魔め・・・」

「あら、先生の方がちっちゃいクセに」

碧衣は勝利の笑みを満面に浮かべてもう一度そう言った。

こうして弘夢はあるうことか、碧衣の身代わりとして合宿に参加する事になってしまったのだった。

「はい、じゃあこれに着替えてね」

碧衣は手に持った大きなバッグから一組の衣装を取り出した。

「ママがね、折角のお出かけなんだから可愛いお洋服で行ってきなさいって用意してくれたんだけどさ、あまりにも幼稚な衣装だったから普段着で来ちゃったの」

確かに今日の碧衣はいつもの自宅にいる時と変わらない服装をしていた。だがそんな事は問題ではない。

「ちよ、ちよと待ってくれ。僕が着替えるのか？」

「他に誰がいるのよ、変な先生ね」

「いや、いくらキミと入れ替わると言ったって、服装まで変えなくてもいいだろ」

「ダメよ。先生は私の代わりとして合宿に参加するのよ。そんな格好で行ったら男の人だって丸わかりじゃない」

それは当たり前前の理屈だったが、改めて女の子として合宿に参加させられる事実を確認させられた弘夢は顔色を変えた。

「それにさ、先生の今着ている服、私が代わりに借りようかと思っているの」

「え？僕の服をかい？」

「うん、わたし一度男の子みたいな服装ってしてみたかったんだ。ママったら

女の子らしくしてないといけませんって、いつもスカートしか穿かせてくれないんだもん」

「そっか。優しそうなママだけど、厳しい面もあるんだな」

弘夢は少し目の前の少女に同情した。自分とは全く異なる立場ながらも、彼女は望まない生活を余儀なくされているのだろう。

「分かった、着替えばいいんだろう」

「えっ！いいの！？」

「ああ、たった一泊二日の旅行なんだろ。それくらい我慢してやるよ・・・」

弘夢は出来るだけ大人びた口調で言った。

「その代わり碧衣ちゃんは、出来るだけ羽を伸ばして男の子みたいな日常を楽しんでくるんだぞ。それで帰ってきたらまたママや僕の言うことをちゃんと聞いて良い子になること。約束だぞ」

「うん、ありがと先生！」

碧衣は心から嬉しそうにそう返事をした。だがその約束をすぐに弘夢は後悔する事になるのである。

「じよ、冗談じゃないよ・・・これ・・・これを僕が着るの？・・・」

駅構内の多目的トイレの中で弘夢は情けない声を張り上げた。目の前のおむつ交換シートに広げられたのは碧衣から渡された一組の洋服。今日弘夢はこれを着て合宿に参加しないといけないのだ。

「まさか碧衣ちゃんのママの少女趣味がここまでだなんて・・・」

お臍までありそうなほど丈の深いハート柄のコットンショーツ。ショーツとお揃いの柄ながら胸の膨らみの無いキャミソール。襟元と袖口にたつぷりとフリルのついたブラウス。胸元とポケットにリボンのついたデニムのジャンパーズカーツ。レースのついたパステルカラーのボーダーハイソックスに、薄いピンク色のタウンシューズ。そのどれもがもちろん女児用、つまり△学生くらいの子が身につける洋服だ。日頃男児用の服を着なければならぬ事もままあった弘夢だったが、まさかこのような女児服を身にまとわなければならない状況など考えた事も無かった。

「約束しちゃった・・・もんな・・・」

だが今更嫌だなんて言える筈もない。お兄さんぶって碧衣に説教臭い事まで告げたのに、やっぱりやめたなんて言えば家庭教師をクビになるどころか碧衣を大きく傷つけてしまうかもしれないのだ。いや逆にそれどころか、怒った碧衣にロリコン教師扱いされる羽目になる可能性だってある。弘夢は恥も外聞も捨

て去り、死ぬ思いでショーツに手を伸ばした。

「これって・・・」

そこで弘夢はある意味重大な事に気がついた。そう、その下着が新品で無いことにだ。その証拠に内側のタグには『4-2吉野あおい』としっかりと書かれている。よく見ればまたぐりのステッチはほんの少しだけほつれており、クロッチの部分はわずかながら純白ではない。

「あ、碧衣ちゃん・・・いいのかな・・・」

とんでもない程の罪悪感を胸に抱えながら弘夢はそのショーツを足に通す。これは只の布きれだと意識しようとしても、柔らかな素材が内股をくすぐる感触が彼を辱める。

ましてや同じ物を碧衣ちゃんも穿いた事があるなんて想像すると、彼のいけない部分は小さいながらもピクピクと反応してしまっていた。

「だめだ。これじゃあ変態じゃないか」

弘夢は自分の頬を両手でひっ叩いて煩惱を打ち消す。彼のまだ子供のようなベニスと女児用のショーツでもびったりと収まってしまう。いや、なまじ大人の女性用のショーツなら、タックでもしないとこうはいかなかったかもしれない。彼はなるべく自分の姿を見ないようにして今度はキャミソールに手を通した。

男の物のシャツではありえないくらい柔らかい生地。肩紐の部分は文字通り紐でしかなく、ブラジャーもつけた事のない弘夢に恥ずかしい感触を与える。

胸の部分は当然ながらカップさえ無いが、ほんの少し生地が伸びているその理由を想像して、彼はショーツの中をまた少しもじもじとさせてしまった。

下着を着け終えると今度は上着だ。ある意味冷静に考えるところの方が恥ずかしい。下着は上着を着てしまうと他人からは確認しようもないが、これから身につける洋服は誰の目にも女の子用の物を身につけていると知られてしまうからだ。

頬を赤く染めながら弘夢はそのブラウスに袖を通す。袖口のフリルが手首にからまる感覚さえ恥ずかしい。ボタンをとめようとした彼はその部分にゴムが通されており、ボタンなどついていない事に気がついた。恐らく小さな子供向けに脱ぎ着しやすいように出来ているのだろうが、自分がそんな衣装を身につけている事実を彼は改めて思い知らされた。

一方胸のボタンは男性用とは反対の右前合わせだ。花の形をあしらったそのボタンを慣れない手つきで彼は必死に留めていく。一番上のボタンはどうしようかと迷ったが、少しだけ首元がきつかったので外して置くことにした。

それが終わるといよいよジャンパースカートだ。どうやって着ればいいのか

分からない彼はとりあえず手にとってそれを眺めてみる。そうすると思つたよりもずつと丈が短い事に彼は気がついた。言うなれば少し大きめのTシャツ程度しかない。

次に脇に大きな金属製のボタンがある事を見つけ弘夢はそれを外す。胸元のハート型の輪っかも外し、スカートに足を通すと何故か胸が一層高鳴つた。

前当てをつかんで胸元まで引き上げる。さっき外したリングをそこに引っかけると、スカートは信じられない高さにまで引き上げられてしまった。

「スカート、短すぎるよおっ・・・」

鏡で確認して弘夢は青くなった。無論それは少しくらいなら肩紐の部分で調節する事も可能だったのだが、オーバーオールさえ着たことの無い彼にはそんな事は思いつきもしなかった。

背中を向いて少し前傾姿勢を取ると、お尻の部分のショーツは丸見えになってしまう。動きにはかなり気をつけなさいといけないなど彼は肝に銘じて脇のボタンを留めた。

靴下と靴を履いてから改めて鏡で確認すると、確かに碧衣くらいの年頃の少女が着ていると恥ずかしくなるくらい幼いデザインのジャンパースカートだ。厚めのデニムの生地は腰の下から真つ直ぐにと広がったままでもっとも太ももに触れず、何も穿いていないみたいに下半身をスースーと風が吹き抜けていた。

「うわあ先生、やっぱ似合ってる！」

トイレの前で待ち構えていた碧衣が驚愕の声を上げた。大笑いされる事を覚悟していた弘夢だったが、似合っていると言われるのも逆に恥ずかしい。

「ひよつとして私よりはまってるんじゃない？ほら、ヘアアクセも付けてあげるね」

碧衣はそう言って嫌がる弘夢の前髪を撫でつけ、自分の髪から外したキャンディー柄のバッチン留めを付けてやる。そうすれば色鮮やかな子供服に頭からつま先まで完全にコーディネートされ、弘夢はどこから見ても△学生くらいの女の子にしか見えなくなつてしまった。

「やっぱサイズもびつたりだね。靴もきつくくない？」

「う、うん・・・」

弘夢は恥ずかしげに頷く。

「ほら、一番上のボタンもちゃんと留めない」と

まるで姉のように碧衣は彼の首元のボタンを留めてやる。

「こうしないと折角の襟のフリルが可愛く無いでしょ。ほら、鏡見てみて」

そう言って碧衣は手鏡を弘夢の顔の前にかざす。そこに映っていたのは確かに小さな少女にしか見えない彼の姿だった。

「んふふ、先生可愛いよ」

そう言われても言い返す言葉も出てこなかった。不思議な事にこんな格好をしていると気持ちまで女の子になってしまおうようで、先ほどまでの年上としての義務感がどこかに消え去ってしまったかにさえ思えた。

「じゃあ私も着替えてくるから大人しく待っててね」

碧衣は弘夢が脱ぎ去ったばかりの洋服を手にとり、入れ替わりにトイレに入ろうとした。

「あっ！」

その後ろ姿を弘夢は思わず引き留めた。

「どうしたの？」

「あっ・・・いや・・・なんでも・・・ない・・・」

「おかしい先生」

碧衣はクスリと笑ってドアを閉めてしまった。

今僕は何を言おうとしてたんだろうかと弘夢は自問した。碧衣に自分の服を取られてしまうかのような気持ち・・・彼女がそれに着替えてしまえば自分が男の服装に戻れないという不安な気持ちがあったのは事実だ・・・だけど何かが違った。

五分、十分立っても碧衣は出てこなかった。女の子の着替えだから長くなるのは分かるけど、その間ずっと一人で立っている弘夢は心細くて仕方なかった。目立つ姿で一人で立っている弘夢の姿をトイレを利用する客が数人チラチラと気にしながら通り過ぎる。女の子の格好をしている自分を、大学生にもなつて△学生の女の子みたいな姿をしている自分を見知らぬ人に見られていると思うだけで恥ずかしくて仕方無かった。

まだ誰かが一緒に、そう碧衣ちゃんさえ隣にいてくれればマシなのに。そこまで考えて、弘夢はもう大人である自分が遙かに年下の少女を頼りに思っている事に気がついて愕然とした。

「お待ちせ」

それを待っていたかのようにトイレのドアが開いた。

「ゴメンな、ちょっと手間取っちゃったからさ」

さっきとは異なる口調で話す碧衣の姿はまるで本当に男の子のようだった。

「どう？」

碧衣はその場で両手を伸ばしてみせた。先ほどまで弘夢の着ていた黒いプリン

トのラグラン袖のTシャツと灰色のハーフパンツが思いの外似合っている。整髪料でも付けたのか、女の子らしかった髪は適度な程に無造作に纏められ、やんちゃ少年の雰囲気醸し出していた。

「う、うん・・・似合うよ」

弘夢が小さな声で答える。それは本心だった。ひよっとしたら自分よりも男の子らしく見えるかもしれないとさえ彼は感じていた。

「そう、ありがと。先生も女の子にしか見えないよ」

「だ、だめ！先生なんて言っちゃ・・・」

いくらなんでもこんなに小さく見える『先生』がいる筈も無い。弘夢は周りをキョロキョロと見渡しながら恥ずかしそうに言った。

「あはは、もうすっかり女の子してるじゃん。その調子で二日間頼むよな」

碧衣はもうすっかり男の子になりきっているようだった。だが弘夢にとつて先ほどの「たった二日間」は今では「二日間も」に変化しつつあった。

「見てみて、可愛いカッブルね」

傍を通り過ぎていく高校生くらいの女の子が小さな声で囁くのが聞こえた。彼女たちには僕が碧衣ちゃんの『彼女』に見えているのだろうか。自分が女の子に見られるのがこんなに恥ずかしいなんて想像もしていなかった。こんな事を二週間も我慢しないとけないのだろうかと弘夢が怯えるのにも構わず、碧衣は持ってきた大きな鞆の中から小さなショルダーバッグを取り出した。

「ほら、これお前の手荷物な。これさえ持って行けば大丈夫だから」

それは弘夢の着せられている服装にぴったり、可愛らしい女兒向けショルダーバッグだった。弘夢が知るはずも無かったが、その鞆は上下の服と同じメーカーの製品だからコーディネートが完璧なのは当たり前だ。

「えっ？これだけ？」

だが弘夢が驚いたのはその鞆の小ささだった。いくら一泊だけの小旅行と言っても普通はポストンバッグくらい持って行くものだ。第一この小さな鞆に着替えなどが入っているとは到底思えない。

「まあまあ、心配しなくていいから」

しかし碧衣はそう言ってその鞆を弘夢に押しつけた。

「今回の合宿は引率してくれる先生がいるから、着替えとかは全部任せておけばいいんだよ。碧衣ちゃんはその様な事にせず女の子らしく振る舞ってあげればそれでいいからさ」

「あ、碧衣ちゃん？」

突然そう呼ばれ弘夢は驚いた。



「そうだよ、今からはキミが吉野碧衣なんだ。小さな女の子のね」
分かってた事とはいえ弘夢は真っ赤になってしまった。
「いいこと、今日と明日はキミは女の子になりきること」
碧衣は人差し指を立てて言い聞かせるように弘夢に言う。それは先ほどまでの立場を丁度逆にしてしまったかのようにだった。

「そうしないと恥ずかしいのは僕・・・いや、男の子だって知られて恥ずかしい思いをするのはキミ自身なんだからね」

碧衣の言うことには弘夢も異論は無かった。付け加えるとすれば『大学生の』男の子だと知られてしまえば筆舌にしがたい恥辱にまみれてしまうという現実だけだった。

「う、うん・・・」

少女の衣装というものは心にまで作用を及ぼすらしい。弘夢は何度も何度も碧衣に向かつて、まるで遠足前に先生の注意を聞く△学生のように頷いていた。

「本当に分かっている？」

「その・・・つもり・・・だけ・・・」

「じゃあテストね」

「えっ？」

弘夢が聞き返すよりも先に、碧衣は驚いた事に彼のスカートをその場で捲り上げた。

「うわあああああっ！！」

咄嗟に出たその声に通行人達が振り返る。気がつけばデニムのスカートは折ったように腰の辺りでまくれ上がったままで、彼は多くの人に女兒ショーツを穿いた下半身を晒してしまっていた。

「ひゃっ！」

彼はもう一度悲鳴を上げて慌ててスカートを下ろした。見た目は小さな少年少女だから騒ぎ立てる通行人はいない。若い女性などは逆にほほえましいものでも見るように通り過ぎていったが、弘夢としてはたまったものではない。

「な、なにするんだよ」

彼は小声で碧衣に抗議した。

「一度やってみたかったんだよな。スカート捲りってさ」

「だからって今しなくてもいいだろ！」

「ほらほら、また男の子の言葉になってるよ」

そう言われて弘夢は慌てて口を押さえた。

「だからテストだって言っただろ。今みたいに男の子みたいな声で悲鳴を上げたら、小さな子は敏感だからすぐに男だってばれちゃうよ。ああいう時はスカートをすぐに押さえて、きやあつとか言えるようにしないとね」

「だ、だって・・・」

「だって何も無いよ。そんな事じゃすぐに女の子の格好してるって事も忘れてパンツとかみんなに見られちゃうよ」

「そ、それは・・・」

そこで彼は自分の穿いているショーツが碧衣のお古だと言うことを思い出した。

「ね、ねえ・・・あの・・・このパ・・・パ・・・パンツ・・・って・・・」

「ああ。僕が三年生まで穿いていた奴だよ」

碧衣はあっさりと言った。

「四年生になってからちよつとサイズが小さくなったからね。どう、先生のお尻にはきつくはない？」

「ば、ばかっ！」

そんな風に問われても弘夢は頬を赤くすることしか出来なかった。

「それより・・・」

そう言っただけで碧衣は彼の両肩を掴みそのまま壁際にまで押しやると、耳元に息を吹きかけた。

「そんな事より、股間のものに気をつけないと大変な事になっちゃうよ」

碧衣は彼に覆い被さるようにしてスカートの裾に手を伸ばす。

「やっ・・・やめっ・・・」

そのまま碧衣の手は短い弘夢のスカートを捲り上げて、彼のショーツの前部分に手の平を押し当てる。

「だ、だめだよ。こんなところで・・・あっ・・・」

「ほら、少し大きくしてるんじゃない？」

「だっ・・・やっ！・・・ひゃあっ・・・だめだっばあっ・・・ぼ、ぼくは・・・」

「僕は何？私の家庭教師だっけ？言いたいの？違うだろ、今の君は吉野碧衣。四年生の女の子だろ？」

「だ・・・だけど・・・」

「女の子がこんなところ固くしちゃダメだろ。目立ったら僕にだって迷惑がかかるんだよ」

「そんな・・・こと・・・いわれ・・・ても・・・ああっ・・・」

そうは言われても弘夢のものは小さな手で包まれて、ますます固さを増していくばかりだった。

「なんだよ、こんなに大きくしてどうするつもりさ？ひよっとして先生興奮してるの？女の子の服着て、みんなに見られながら教え子にクリトリスをさわられて興奮しちゃってるの？」

「そ、そんな・・・ことっ・・・」

弘夢は碧衣の、今時の四年生の早熟さ加減に今更ながら驚いた。だが頭は拒否

しようとしながらも彼の若い下半身は言うことをきかなかった。

「い・い・いや・だ・だ・だめ・だめ・だめ・だめ」

「あーあ、もう収まりつかないね。こうなったら一回出しておいた方がいいかな」

「えっ!?! い、あっ! だめっ! こんなところで!」

「こんなところでこんなにしてるのは誰さ? ほら、気持ちいいんでしょ?」

碧衣は右手で彼のものを包み込むと、ゆっくりと腕を上下させる。

「いつ・いつ・そ・そ・んな・ひやあつ!」

それは瞬間的な出来事だった。一瞬飛び上がるように弘夢の踵が浮き、次の瞬間彼のものはショーツの中を白い液体で汚してしまっていた。

「あーあ、あたしのパンツ汚しちゃったね」

「ご、ごめん・ごめん・ごめん・ごめん・ごめん」

教え子に手を出されてしまったなんて。それも教え子のお古のショーツの中に出してしまったなんて、もはやなんの言い訳も出来なかった。射精後の罪悪感と合わさったその後悔の念は弘夢を戻す事のできないところまで追い込んでしまった。

「まあいいじゃない。これで旅行中はこの子も大人しくできるんじゃない?」

碧衣は指で彼のペニスを弾いてみせた。

「ひやっ!」

思いの外その刺激が強く、彼はもう一度ペニスをビクビクとうごめかせた。

「あっ、そろそろ時間だ」

だがそんな中、時計を見上げると碧衣は急に調子を変えた。

「ちょ、ちょっと待ってよ。これどうしたらいいんだよ」

情けなさそうに彼は下を向いて言った。碧衣はすぐに答える。

「心配しなくていいよ。その鞆の中に換えのショーツが入っているから」

「えっ?」

「こんな事もあるかと思ってね。本当は別の目的で入れておいたんだけど、叱られちゃうかな?」

「叱られるって、誰に?」

「いや、こつちの話。それよりさ」

碧衣はもう一度彼に耳打ちした。

「一応私の穿いていたパンツなんだから、ちゃんと皮剥いてオチンチン洗ってから穿いてよね。どうせ包茎なんでしょ?」

「ば、ばか!」

両手を振り上げた弘夢からひよいと逃げるようにして碧衣は舌を出した。

「じゃあもうすぐ駅前に貸し切りバスが来る事になってるから。キミは吉野碧衣ですって名前を言っただけで大丈夫なのだろうか。不安に胸をドキドキとさせながら弘夢は碧衣の目を見つめ返した。

「大丈夫だよ、安心して。先生なら小さな女の子として生きていけるって」

碧衣はそう言っただけで弘夢の手を握った。

「えっ？」

「あっ、ごめん。もうすぐ電車が来るから僕はそれで出かけてくるね」

「あっ、うん」

柔らかく温かい手がするりと逃げていき、再び孤独と恐怖が弘夢を襲う。碧衣の後ろ姿を見ながら、そう言えばなんの合宿かさえも聞くのを忘れていた事に弘夢はようやく思い当たっていた。

第三章 合宿所のおねえさん

碧衣と別れた後弘夢はもう一度トイレの個室に入り、濡れたティッシュでペニスを綺麗に拭いた。だが完全に彼女に言われた通りには出来なかった。なぜなら彼のペニスは真性包茎で皮を剥くことさえ困難だったからだ。

バッグをおそろおそろ開けると、確かにその中にはビニール袋に包まれたショーツが何枚か入っていた。だが手にとって見て彼はそのデザインに目を覆いたくなくなってしまった。どれも先ほどのショーツよりさらに子供っぽい、女兒向けアニメのプリントがされたショーツだったからだ。

だからと言ってまさかノーパンでいる訳にもいかない。彼はその中から一枚のショーツを選び、代わりに洗ったばかりの濡れたショーツを入れておく。捨てようかとも思ったが碧衣に確認してからの方が良いと考えたのだ。

ショーツの中には同じように『3-4よしのあおい』と書かれていた。姓の方もひらがなになっているのがなんだか前のショーツよりも恥ずかしい。碧衣の顔を思い浮かべながら、彼は先ほどの行為を反省するしか無かった。

通行人に気付かれなかったのが幸いだったが、その気になればいくらでも拒否は出来た筈だ。だがそんな風に後悔しながら、碧衣の大胆さに驚きを隠せないのも事実だった。

「まだまだ小さいって思ってたのに・・・」

今時の四年生の性に対する早熟さを知り、これから自分のしようとしている事の大胆さによりやく気付いた弘夢は、このまま逃げ帰ってしまおうかとさえ思ったがそれも出来なかった。

待ち合わせ場所に碧衣が現れなければ当然彼女の自宅に連絡が入るだろうし、そうなったら弘夢のメンツは、いや自分のメンツなんかより碧衣の人を信じる気持ちには激しく傷付いてしまうだろう。いくら早熟だと言ってもそれとこれとは又別の話だ。弘夢に残った先生としてのプライドと人としての優しさは、震える足を無理矢理に駅前のバスターミナルに向かわせた。

既に通勤ラッシュの時間は過ぎているから構内に人はまばらだ。しかし夏休みであるが故に暇をもてあました若い男女の姿はちらほらと見え、自分と同い年くらいのその好奇心溢れる視線に弘夢は恐々とした。

歩き始めると初めて穿いたスカートの裾のフリルが太ももをくすぐる。パンツを隠すことがやっとの短さは彼に男らしく大股で歩くことをも制限し、これから二日間女の子でいなければならない事を彼に改めて知らしめた。

多くの改札口が並ぶ正面の北口とは違い、バスターミナルのある南口は思った

よりも閑散としていた。それでも一歩駅を出ると初夏の明るい日差しが弘夢を照らし、女の子の姿で白昼堂々と往來を歩いている恥ずかしさを更に感じさせた。

「ねえねえ、あなたも合宿に参加するの？」

そのとき突然そんな風に声をかけられ、弘夢は飛び上がるほど驚いた。

「一人でこんなところに立っていたら危ないわよ。学校で先生に注意されていない？」

振り向けば二人の少女が立っていた。一人は短い髪をした一見少年に見える活発そうな女の子。メジャーリーグのキャップをかぶり、それほど気温も高くないのに半袖のTシャツに涼しそうな水色のハーフパンツを穿いている。その胸のわずかな膨らみだけが彼女が女の子であるという事を控えめに告げていた。

「まさか迷子じゃないよな？」

しゃべり方まで男の子のようだった。彼女は自分より十センチも背の低い弘夢を完全に年下だと認識したのか、膝に両手をあてた中腰の姿勢で彼に視線を合わせた。

「お父さんお母さんはどこ？名前は言える？」

「・・・あつ・・・あつ・・・そのつ・・・」

弘夢は完全に狼狽した。目の前の少女達はどう見ても口学生くらいにしか見えず、彼は自分が小さな少女だと思われている事になかなか思い至らなかったのだ。

「まあまあ、彩加ちゃん。そんなに一度に言ったら可愛そうじゃない」

もう一人の少女がそう口を開いて言った。どうやら二人は友人らしいがその見た目は対照的だ。真っ白サマーワンピースにボレロを羽織ったその少女は、見た目通りおっとりとした声で弘夢に話しかけた。

「ごめんなさいね。私達これから目能研の合宿に行くんだけど、あなたもその参加者なの？だったら一緒に行きましょうか」

にこりと笑う少女の笑顔にはどこか人を安心させるような効果があった。弘夢は少し落ち着きを取り戻して答えた。

「あ、あの・・・ここにバスが来ているからそれに乗ればいいって・・・」
だが口から出たのは自分でも驚くくらい迪々しい言葉だった。

「そうママに言われたの？」

「い、いや・・・」

「お父さんに？それとも先生に？」

「そ、その・・・」

適当に返事をすれば良かったのだが、自分を見つめる少女の純粋な瞳に弘夢はウソをつけなかった。

「・・・あ、碧衣ちゃんに言われ・・・て・・・」

「碧衣ちゃんって誰？同級生かしら、それともお姉ちゃん？」

しまったと思いつつも弘夢はその問いに頷いていた。

「そうお姉ちゃんがいるのね。そのお姉ちゃんはここに来てないの？」

「う、うん・・・今日は他に用事があるからって・・・」

自分は何を素直に喋ってるんだと思いつつも、弘夢はついつい少女のペースに巻き込まれてしまっていた。女の子は何度か頷く仕草を見せて理解したとばかりに言った。

「ならきつと私達と一緒にのバスね。あなたも目能研の生徒なんでしょ？」

「えっ？・・・えつと・・・」

目能研といえば△□学生専用として全国的に有名な学習塾だ。そう言えば碧衣も算数や理科については学習塾に通っていると玲子に聞かされた事を弘夢は思い出した。

「う、うん・・・そうです・・・」

「はい」では無く「うん」と答えて彼は頬を赤くする。それはあまり大人びた口調だと怪しまれてしまうかとの咄嗟の判断だったが、小さな女の子振りをするのがどれだけ恥ずかしいかと言うこともまた彼は再確認してしまった。

「じゃあ一緒に行きましようか。お姉さんの代わりに私達が案内してあげるわ」少女は弘夢の手を握って笑顔を見せた。

「私の名前は相川香澄。こっちは倉島彩加っていう私のお友達よ」

「よろしくな」

彩加と呼ばれた先ほどの少女は弘夢の頭をぼんぼんと二度叩いた。その横柄な態度に弘夢は腹を立てたが、それを行動に表す事など出来なかった。

「よ、よろしくお願いします」

その代わりに彼はそう言って深々と頭を下げた。

「あら、意外と礼儀正しいのね」

「ホントだ。しっかりしてるのか頼りないのか訳のわかんないやつだな」

苦笑する二人を見て弘夢はしまったと後悔した。これからはもう少しあどけない言動をするように注意しなければならぬと彼は肝に銘じた。

バスの前には既に生徒達の人だかりが出来ていた。

「ギリギリ間に合ったな」

「もうっ、彩加ちゃんが寝坊するからでしょ」

「香澄だって便所に行ったじゃないか」

「馬鹿っ！大きな声で言わないでよ」

よほど仲が良いのだろう。二人はそんな会話を交わしながら弘夢と共に引率らしい女性の前に向かった。

「あなたたちで最後よ。もう少し早く集合するようにね」

少し厳しい目つきをした、まだ二十台前半の彼女はそう言って手元の書類に目をやる。

「名前と教室名、それから学年を言ってくれるかしら」

即座に彩加が声を張り上げた。

「倉島彩加、中野第三教室に通っている四年生です！」

驚いたのは弘夢だ。明らかに自分を年下だと思っている彼女が、彼の目からは□学生にも見える彼女たちがまさか四年生だなどと思ってもいなかったのだ。

「相川香澄です、同じく中野第三教室に通っている四年生です」

当然ながら香澄も同じ四年生だった。碧衣も大人びているとはいえこの二人は別格だ。弘夢は最近の△学生の大人っぽさに驚愕しながらも弱り果てた。

「ほら、名前くらい言えるでしょ」

彩加が彼の背中を叩く。口に出してしまえばどうということになるか分かっていても彼は答えなければならなかった。

「よ、よしの・・・あおい・・・世田谷・・・教室の・・・」

教室名は碧衣の家の住所から感で言った。女性は書類をちらりと見て訂正する。

「世田谷西第二教室ね」

「は、はい・・・そ、その・・・よ・・・四年生・・・です・・・」

それは消え入りそうな声だったが、彩加と香澄は同時に驚いた声を漏らした。

「ええっ！？あなた四年生だったの？」

「なーんだ、同い年じゃん。とつてもそうは見えないけどさあ」

弘夢は穴があいたら入りたかった。実際は大学生なのに、△学四年生にさえ見えないと年下の少女達に笑われてしまっているのだ。

「これで全員揃ったわね」

だが一つ目の難関を突破した事もまた事実だった。引率の教師のその発言は、弘夢がなんとか目能研の合宿に潜り込めた事を表していた。

「でもそう見ても同学年には見えないな」

「ねえねえ、碧衣ちゃんっていうの？可愛い名前ね。折角一緒になったんだから碧衣ちゃんって呼んでいいかしら？」

どうにも馴れ馴れしい二人に弘夢は辟易しながらも無視する訳にはいかなかった。

「う、うん・・・いいよ」

考えてみれば合宿中ずっと一人でいるよりもある程度の友人がいた方がスムーズに事が運ぶかもしれない。幸いにもこの二人は自分が吉野碧衣だと信じ込んでいるようだし、それなら僕もなりきってやろう。そう考えてから弘夢は引き攣った作り笑いを浮かべて言った。

「じゃ、じゃあ。二人ともお友達になつてくれる？」

「もちろんよ」

香澄が伸ばしたその手を弘夢はぎゅつと握りしめた。

「でも友達っていうか、碧衣って妹って感じだよな」

彩加がニヤニヤと笑いながら二人に割って入った。

「じゃあ僕の事は『彩加お姉ちゃん』って呼んでくれていいぜ。『彩加先輩』でもいいけどさ」

「もうっ、彩加ちゃんつたら同学年なのに碧衣ちゃんが可愛そうでしょ」
ねえっ、と言って同意を求めた香澄に対して、弘夢は苦笑いを浮かべる事しかできなかった。

三人が乗り込むとバスはすぐに動き出した。乗っているのはおよそ四十人ほどの生徒達だ。保護者同伴で無いためか、さすがに一二年生に見える参加者は少ないが、彩加や香澄同様に自分より大人びて見える△学生やほんの一握りの□学生達の姿は弘夢を一層萎縮させた。

「はい、みなさん静かにして下さい」

気がつけば先ほどの女性がバスガイドの代わりに運転席の傍に立ちマイクを手に取っていた。

「私は世田谷本部教室教務長の中川詩織といいます。今日から二日間あなたたちの面倒を見ることになっていきますからよろしくお願いしますね」

口調は丁寧だがその節々に厳しさを感じさせる声だった。教務長というのがどれほどの役職なのかは知らないが、この若さで長を任せられるというのはよほど優秀なのだろうと弘夢は邪推した。

「今日からみなさんは我が目能研の合宿に参加してもらいます。もうご両親から聞いてもらっていると思うけど、今回の合宿の目的は二つあります」

生徒達は大人しく話を聞いている。そんな事を初めて聞かされる弘夢も彼女の声に耳をそばだてた。

「一つ目はみなさんの学力検査です。これは本来なら定期的に各教室で行っているのですが、今回は環境を変えてみなさんがどれほどの実力を発揮できるかのテストとなります」

「ねえねえ、どういうこと？」

弘夢の隣に座っている彩加が更に隣の席の香澄に小声で尋ねる。

「うーんと、よくわかんないけど、どんな環境でも緊張しないで問題が解けるかって事じゃない？」

「そんなの当たり前じゃん。教室だろうが合宿所だろうが一緒だよ」

「わたしに言われても困るわよ」

彩加はまだ不思議そうな顔をしていたが、仮にも家庭教師というアルバイトをしている弘夢には学習塾側が行おうとしている調査の意図が汲み取れた。彼女らはおそらく生徒達を親と離し、また馴染みのない場所面で面識のない別教室の子達とも一緒にさせた上で、その不安な状況の中でも実力を出せるかを調べるつもりなのだろう。なぜなら実際の受験はまさしく同じ状況で行われるからだ。

「はい、そこ静かにしなさい」

注意されて彩加が頭を掻く。

「二つ目は普段勉強漬けのあなたたちにちょっとした息抜きを与える事。明日は東京ファンシーランドで自由行動だから楽しみにしているように」

生徒達から一斉に歓声が沸き起こり弘夢はほんの少し気が楽になった。今日はこれから合宿所についてテスト。これは百点なんか取ったらかえって困ったことになるので、適当に碧衣が間違えそうな場所をわざとミスしておけばいい。明日になれば遊園地で自由行動だから適当に暇をつぶせばすぐに帰りのバスに乗って元の姿に戻る事が出来る。そう言えばファンシーランドなんて中学の修学旅行以来だな。折角だからちよつとは楽しんでもいいかな。

そんな余裕さえ頭に浮かんできた弘夢だったが、現実には彼にそんな安らぎなどを与えてはくれないのだった。

そのままバスに乗ること約二時間。車は都会から離れ、郊外の田園地帯を走り抜けて、ようやく目的地についた。

「うわぁ、これって民宿ってやつ？」

今時の女の子らしい感想を彩加がこぼした。おそらく立派なホテルでも想像していたのだろう。

「わたしも和風のホテルなんて初めてだわ」

おそらく二人とも立派なホテルでも想像していたのだろう。もうこの時点で塾

の策略に乗らされているなど弘夢は苦笑した。きつとこんな寂れたところに泊まった事の無い生徒達に動揺を与えようとしているのだ。

「はい、みんな荷物を持って中に入りなさい」

バスの中の遠足気分から一転、不安そうな表情の生徒達はきよろきよろと辺りを見渡しながらぞろぞろと旅館に並んで入る。見た目よりも中は綺麗にされており、数人の従業員が皆を出迎えた。

「旅館しまもとへようこそ」

一番年配の和服姿の女性が頭を下げ、詩織が小さな子ばかりで騒々しいとは思いますがよろしくお願ひしますと頭を下げ返した。

「いえいえ、みんな元気の良い事うちとしても楽しいですわ」

和服の女性が皆を見渡し、口に手を当てて上品に笑う。自分も小さな子達の中にひとくくりにされている事を思い出し、弘夢はほんの少し憤慨した。

「では早速お部屋に案内させていただきますね、曜子ちゃんお願ひ出来るかしら」

「はい」

脇に並んでいた従業員らしい女性の一人が皆の前に歩み出る。

「倉科曜子と申します。みなさんのお世話をさせていただきますので、何か困った事があつたら声を掛けて下さい」

丁寧だが、どこかその話し方はビジネス口調で、表情も笑っていなかった。弘夢にはその声が、どうして私がこんな子達相手に敬語を使わないといけないのよと語っているようにも聞こえた。

「ではお部屋へご案内します。先に女の子から、迷われないようについてきて下さい」

曜子はそう言って生徒達を見渡した。おそらく出来るだけ人数と顔を覚えようとしているのだろう。だがそんな彼女の視線が弘夢の方を向いたまま止まる。

一瞬無表情だった曜子の顔が驚きに変わるのを弘夢は見逃さなかった。まさか大学生だと知られた訳では無いと思いつつも弘夢は心臓をドキドキとさせた。「こちらです」

だが曜子は何事も無かったように振り返ると皆の先頭に立って、弘夢達が泊まる事になる大部屋へ向かってゆつくりと歩いて行った。

驚いた事に部屋は男子と女子それぞれ一室だけだった。中高生のクラブ合宿にも使われる事があるらしいと詩織は説明してくれたが、多くの生徒達、特に年長の女の子は不満のようだった。

「□学生とも一緒だなんてサイアクだよな」

「仕方無いじゃない。そういう趣向みたいだし」

香澄の方は塾側の計算を少しは理解しているようだった。

「まあいつか。こうして碧衣とも一緒に部屋になれたんだし」

彩加はぬいぐるみにでもするように弘夢の体を抱きしめた。

「やっ、やめてよっ！」

弘夢はじたばたと暴れたが、彩加の方が一回り体が大きい上にスポーツでもしているのか彼より力も強かった。

「あはは、ほんと妹みたいに可愛いよな。これで同い年なんて思えないよ」

同い年どころか本当は大学生なのだが、もちろん弘夢には本当の事を言える筈も無かった。

「あんたたちうるさいわよ」

だが不意に聞こえたそんな声に弘夢は彩加の腕から解放された。振り返ると彩加よりも背の高い少女が二人並んでこつちを睨んでいた。

「こういう場所では静かにしないとイケないでしょ。そんなことも分からないの？」

少女の一人がつかつかと彩加に歩み出る。

「あんた随分大きいけど四年生でしょ。合宿の間は私達〇学生の言うことを聞いてもらうからね」

それは年長者としての義務というよりも、ただ威張りたいたけだけの発言に弘夢には聞こえた。少女は居丈高に彩加に言った。

「あんた、どこの△学校？」

「上鷹宮△学校・・・だけど・・・」

彩加は不満そうに答えた。

「上鷹宮△学校です、でしょ。先輩に向かって口のきき方もしらないの」
少女は不満そうにして今度は弘夢の方に向きなあった。

「あなたも同じ学校？」

「あ・・・い、いや・・・」

弘夢はどうしていいか分からずに首を横にぶるぶると振った。

「じゃあどこの△学校？」

「そ、その・・・」

彼は碧衣の通っている△学校の名前を必死に思い出そうとした。だが焦れば焦るほどその名前が出てこない。

「なによ、自分の通っている学校の名前も言えないの？ひよっとしてあなた幼稚園児？」

もう一人の少女が意地悪そうに笑う。こちらも△学生とは思えない大人びた格好をした女の子だ。

「まさかあんたも四年生とか言うんじゃないわよね」

長い髪をポニーテールにし、蛍光ピンク色の派手なシュシュを付けたその少女は座り込んで弘夢の顔を覗き込んだ。

「とっても可愛い服着てるわね。ママにおねだりしたのかしら？」

「こ、これは・・・その・・・」

「うんうん、分かるわよ。可愛いお洋服着たくて仕方無いお年頃だもんね。お名前はなんていうのかしら？」

「よ、よしの・・・あおい・・・です・・・」

弘夢はようやくそれだけ口にした。

「そう、とっても可愛い名前ね。お年はいくちゅ？・・・みっちゅかな？それともよっちゅ？」

ポニーテールの少女は馬鹿にした口調でそう言って笑った。

「おい、お前らしい加減に！」

彩加が立ち上がろうとするのを香澄が引き留めた。□学生の少女達は少しじろいで言い返す。

「あら□学生に逆らうつもりなの。年下のクセに生意気ね」

「違う学校のクセにそんなの知るかよ！それに碧衣は幼稚園児なんかじゃねえよ。あたし達と同じ四年生なんだからな！」

「へえっ、本当に四年生なんだ」

□学生達は本心から驚いたようだった。だがその事に幼稚な格好をさせられている自分が△学四年生にさえ見えない事を弘夢は改めて自覚させられてしまった。

「そう。じゃあお歳聞かれたら四本手を出して『よねんちえいでちゅ』って言うてくれれば良かったのに。ほら出来るでしょ、やってみせてよ」

「あ、あの・・・そんな・・・」

「ほら、言えるでしょ。それとも自分の歳も言えない赤ちゃんなのかしら碧衣ちゃんは」

「お、お前らしい加減に・・・」

先ほどまで自分がからかっていた彩加だったが、その□学生達の陰湿な言葉責めに我慢が出来ない様子を見せた。

だがそんな中、いつの間に入ってきたのか詩織の声が部屋中に響く。

「はーい、では今から別の部屋に移動して簡単なテストを行ってもらいます。」

筆記用具を持って私についてくるように」

弘夢は心の底からホッとした。だが□学生は弘夢達に捨て台詞を残した。

「あんたらがその気ならこっちにも考えがあるからね。あたしの名前は如月理香、こっちは春川杏奈。一応名前くらい覚えておいたほうがいいわよ」

理香と杏奈というこの二人の□学生の為、弘夢の合宿生活は更に恥辱にまみれたものになるのだった。

移動した場所は小さな教室風の部屋だった。さすがにこちらは長机に椅子が並べられた洋室だ。正面には大きなホワイトボードが設置されており、恐らく普段は会議などに使用される部屋なのだろう。弘夢達は学年に関わりなく全員がその部屋に集められた。

「人数が少ないからこの部屋でみんな一緒にテストを受けてもらいます」

少人数の為と詩織は言ったが、恐らくこれも日常とは違う環境を作り出すための演出なのだろう。

「あとで筆記テストも受けてもらいますが、最初に普段と同じように問題を解いてもらいます。それから今日は外部から先生に来てもらいました」

徹底したものだ弘夢は感心した。詩織は自塾の講師では無く、普段とは異なる雰囲気的人物を用意したのでだろう。

「中原先生、どうぞお願いします」

入り口と別のドアを開き、詩織が一人の女性を教室に招き入れた。

見た目はかなり若い。長く伸ばしたさらさらの髪に優しい微笑みを浮かべた表情は詩織と正反対で、彼女よりも更に年下に見える。

「わあ、綺麗な先生ね」

彩加と香澄が同じような感想を口からこぼしたが、弘夢は全く異なる思いでいた。

『ちよ、ちよつとまってよ！』

まるで胸の中で心臓が回転しているかのようなようだった。動悸は速くなり体中に冷や汗を感じる。ホワイトボードの前に立った女性と目が合さりそうになり、弘夢は慌てて下を向いた。

『ま、まさか・・・こんな事がある筈ない・・・き、きつと他人のそら似・・・』
膝に乗せた手をぎゅつと握って祈った弘夢だったが、その願いは教室に響いた言葉で無残にも崩れ去った。

「中原千鶴といえます。この合宿の間、みんなよろしくね」

中原千鶴。彼女は弘夢の大学の同級生だった。

第四章 算数が解らない

「中原先生はまだ大学生ですが、卒業後はこの塾の先生になる事を希望されています。歳も私よりみなさんに近いですから、合宿の間はお姉さんだと思ってお世話になって下さいね」

詩織の言葉に千鶴が照れ笑いを浮かべる。どういう経緯でこのような話になったのかは分からないが、確かに目の前にいるのは弘夢と同じ年、それどころか彼が少なからず恋心を抱いている同級生の少女だった。

「ではまず一年生の子から前に出てきてもらおうかな」

千鶴はそう指示すると、手際よくホワイトボードに問題を書いていく。どうやら普段と違う環境で皆の前で問題を解かすという趣向のようだったが、弘夢にはもうそんな事を分析している余裕など無かった。

「はい、じゃあ次は二年生の子、前に出てくれるかな」

まだ小さな子達の前に出て必死にマジックを握っていた。弘夢は必死にどうしようかと悩んだが解決策などあるはずもない。一瞬トイレなどと言って逃げたそうかと思ったが、そんな事をすればかえって目立ってしまう。それにまさかこのまま自宅まで逃げる事など出来ないのだ。

教え子に頼まれてと正直に言うべきだろうか。いやそんな馬鹿な話を信じてもらえる筈も無い。信じてもらえたとしてもこんな姿を見られるなんて屈辱すぎる。どうしようもなく追い詰められた中、弘夢にとって死刑宣告とも聞こえる声が響いた。

「それじゃ四年生の子、前に来てくれるかしら」

「おい、碧衣。行くぞ」

立ち上がった彩加が彼の手を握った。

「あ、あの・・・わたし・・・」

「どうした、おなかでも痛いのか？」

「う、ううん・・・その・・・」

「ひよっとしてみんなの前に出るのが恥ずかしいのか？ホント碧衣ってお子様なんだな。大丈夫だよ私達がついてるからさ」

「そうよ。ほら、手を握ってあげるから」

香澄が反対側の手を握る。

「どうしたの。あなたたち早く前に出てくれるかしら」

千鶴の横では既に一人の見知らぬ四年生が困った顔でこちらを見ていた。もう逃げる事さえ出来ない。二人に引きずられるように立ち上がると、弘夢は重い

足取りで手をつながれたままホワイトボードに向かった。

「あらあら、一人ママに手をつないでもらった幼稚園児のお子様がいるわね」
弘夢をやじる声が響き、皆がわっと笑う。先ほどの理香とかいう□学生に違いなかった。

「ダメよ、そんな事言っちゃ」

千鶴は優しく窘めると、弘夢達三人の方を向いた。

『・・・終わった。僕の人生の全てが』

弘夢は真っ赤になって俯いた。どうか千鶴が驚いて悲鳴をあげたりしないようにと願うのが精一杯だった。

「あら？」

不思議そうにする声か耳に届き弘夢は覚悟を決めた。だが千鶴の口から出たのは意外な言葉だった。

「一年生の問題はもう終わっちゃったわよ」

その声に教室がもう一度笑いに包まれた。

「先生、その子そう見えても四年生なんですよ。」

ポニーテールの杏奈という少女が大きな声で言い、千鶴は少し慌てた表情を見せた。

「まあまあ、これは先生が悪かったわね。でもあなた、どう見ても四年生には見えないから」

千鶴はその場に屈み込んで、俯いている弘夢の頭を撫でる。もはや緊張を通り越している弘夢は、氷のように固まったまま何か言い返す事さえ出来なかった。

「ゴメンね。先生を許してくれる？」

それは天使のような笑顔だった。弘夢がいつも教室の隅から盗み見ているその表情を間近で見ることのできた彼はようやく首を縦に振った。

「そう、ありがとね。でももう四年生だったら、一人で前に出る事くらいできないといけないわよ」

そう言われ、弘夢は慌てて彩加達とつないでいた手をふりほどく。香澄はくすくすと笑い、表面的にはほほえましい光景が繰り広げられた。

「じゃあ問題解いてもらおうかしら。緊張しなくていいからね」

どうやら千鶴は本当に自分が同級生だと気がついていないようだ。こんな姿をしているから仕方ないのかも知れないが、その事実が弘夢にとっては嬉しくもあり、また寂しい事でもあった。

「一学期の復習だから簡単だと思うけど」

だがほんの少し安堵した彼の前に、次に立ちはだかったのは文字通り恐るべき

難問だった。

『えっ！？』

弘夢はホワイトボードに書かれた問題に首を捻る。

4年3組の教室の後ろにあるかべの横の長さは12.7mです。掲示係の優子さんは、このかべに、絵の作品34枚を、横に1列にはるようになつたのまれました。1枚の絵の横の長さは25cmで、絵と絵の間やかべと絵の間はすべて同じになるように絵をはりたいたいと思います。優子さんは、絵と絵の間を何cmにしたらいよいでしょうか。

『こ、これが四年生の問題！？』

それは確かにかけ算と割り算のみで解ける問題だった。だがもともと理数系が苦手で、しかも極度の緊張状態にある弘夢にとってそれは簡単な問題なんかでは無かった。

『え、えつと・・・25cmと隙間を合わせて・・・隙間をxとすれば25+xが一枚分の長さだから・・・』

必死に弘夢は頭を回転させたが、なまじ難しく考えようとすればするほど頭がこんがらがらるばかりだった。

『12.7mは127cmだっけ・・・あれ？なんか違うかも・・・』

両隣では彩加と香澄が子気味の良い音を立てて答えを滑るように書いている。その音がますます彼を焦らせた。

『ま、まずい。みんな簡単に解いてるのに僕だけ分からなかったら目立っちゃうよ。そ、それに、いくらなんでも四年生の問題が解けないなんて碧衣ちゃんに会わず顔がなくなっちゃう！』

弘夢はとりあえずホワイトボードに腕を伸ばした。25cmが34枚だからとにかく25×34には違いない。だがその数式を書き終えてから弘夢は弱り果てた。

『ど、どうしよう、二桁のかけ算の仕方ってどうするんだっけ・・・』

弘夢として大学受験を通つたのだから、二年前の彼ならそんな問題は簡単に解けただろう。しかし一年生から完全に文系の単位しか選択してこなかった彼は長い間数学、たとえそれが算数だとしてもそんな問題に触れた事が長い間無く、焦る気持ちはますます二桁のかけ算という△学四年生でも解ける問題を分からなくしていった。

「ちよつと難しかった？」

背中から千鶴の声が響いた。気がつけば両隣の友人ともう一人の四年生も完全に自分の問題を解き終わって弘夢の方を心配そうに見つめていた。

「ひよっとして緊張しちゃったのかしら」

千鶴は優しくそう言うのと、弘夢の肩に手を掛けた。大学生にもなって△学生達の前で△四の問題が解けないところを見られてしまうという、考えられない恥ずかしさに弘夢は真っ赤になりながらも頷いた。

「は、はい。いつもなら解けるんだけど・・・いつもなら・・・」

彼の大学生としてのプライドがそんな苦し紛れの言い訳を吐かせた。

「そうね。碧衣ちゃん・・・だっけ。碧衣ちゃんはいつもはおりこうさんだもんね。知らない人たちや先生の前でちよっと緊張しちゃったんだよね」

だがそんな風に優しくされると、自分が本当に小さな女の子扱いされてしまったように彼は更に恥辱の底に突き落とされた。

「これくらいだったら私でも答分かるよ」

退屈に耐えかねたのか一番前の席に座った二年生の女の子が自慢するように言った。

「25×34で850でしょ。わたしそろばん習ってるからそんなの簡単だもん。そんなのも分からないんだったら、もう一度一年生にしてもらった方がいいんじゃない？」

「これっ、四年生のお姉さんにそんな事言わないの」

千鶴がそう叱りつけたが、教室中に沸き起こった笑い声はなかなか収まる事はなかった。

「碧衣、元気だせよ」

「そうよ。明日になればファンシーランドなんだからさ」

結局筆記試験もさんざんだった。その答案を千鶴に採点されると考えただけで情けなくて穴があったら入りたい気分でいっぱいだ。更に下手をすれば碧衣にまで迷惑がかかるかもしれない。どんよりと落ち込んだ弘夢だったが、彼の恥辱的な合宿はまだまだそんな事では終わらなかつたのだ。

「はい、みんなそろそろ寝る用意をして下さいね」

夜九時になると、千鶴がなやら大きな箱を持って女の子の部屋に入ってきた。弘夢は思わず彩加に隠れるようにした。

「せんせー、私達パジャマを持ってないんですけど」

すかさず理香が手を挙げて質問した。その言葉に弘夢も自分が何も持参していない事を思い出す。

「心配いらないわよ。先生がそのパジャマを持ってきたんだから」

千鶴はそう言って箱を床に置いてからそのふたを開ける。中には女兒用らしい色とりどりのパジャマらしい衣類が詰まっている。

「わーっ！」

比較的小さな女の子を中心に皆がその箱に群がった。

「せんせー、手にとっていいですか？」

「ええ、いいわよ。でも着るのはまだ待ってね」

答えを聞くが早いのが、数人の少女がパジャマを物色し始める。どうやら中は一種類ではなさそうで、その色もサイズもデザインも様々だ。

「わたしこれがいい！」

さきほど弘夢を馬鹿にした二年生の女の子が、ピンク色のパジャマを手にとって声を張り上げた。だが千鶴はその子に言い聞かせるように言った。

「もうちよつと待ってね。みんなに公平に選んでもらうから」

「公平って？」

女の子が口に指をあてて聞き返す。千鶴は立ち上がって皆に聞こえるように言った。

「ついでにさっきのテストを返します。高得点の人から好きなパジャマを選んでいいわよ」

わーっという歓声とえーっという不満の声が一齐に沸き上がった。おしゃれをしたいた年齢の少女達ばかりだから、好きな服を選べないというのは一大事なのだろう。

「じゃあ点数の高かった子から名前呼ぶから、前に出てパジャマを選ぶように。」

まずは片山恭子さん」

「はいっ！」

眼鏡を掛けた、いかにも賢そうな少女が気持ちのいい返事をして千鶴の元に向かう。

「はい、100点でした、おめでとー」

少しだけあどけない微笑みを浮かべて少女は答案を受け取った。

「好きな選んでもいいわよ。サイズは確認してほしいけど」

「あたし、あんまり可愛いの手だから」

優等生の少女はそういうと、水色をしたジャージを手にとって自分の場所に戻った。

「良かった。私隣にある、あの可愛いのが良かったから」

香澄はホッとした表情を見せ、彩加が「俺あれを狙ってたのにな」と残念そうにつぶやいた。

「次、相川香澄さん。98点でした」

「はい」

香澄が呼ばれ、彼女はお目当てのピンク色のパジャマを手に戻ってきた。それはシンプルだが、少女らしさと大人らしさが上手く混在した香澄にとっても似合いそうなパジャマだった。

次々に生徒達の名前が呼ばれ、千鶴の前に積み上げられていたパジャマは段々とその量を減らしていく。あらかじめ予想は出来ていたが、弘夢の名前はいくら待ってもなかなか読み上げられなかった。

そしてとうとう二人だけが残り、千鶴が一呼吸置いてからその名前を読み上げる。

「北条みゆなちゃん」

「はい！」

今にも泣きそうな顔をしていた一年生くらいの女の子が立ち上がった。

「ちよつと緊張しちゃったかな？」

千鶴にそう言われ、女の子は目に涙を浮かべながらも嬉しそうに言った。

「良かった。ビリなんて恥ずかしかったから」

それから女の子はチラリと弘夢の方を見た。小さい子のする事だ。恐らく悪気は無いのだろうが無垢なその視線は弘夢の心にぐざりと突き刺さった。

「じゃあ最後ね」

一枚だけ残った答案用紙をひらひらと宙に泳がせ、千鶴は弘夢にとって残酷な名前を呼んだ。

「吉野碧依ちゃん」

「・・・はい」

無視する訳にもいかず、彼はのろのろとした動作で立ち上がった。

「はい、またちよつと緊張しちゃった？いつもは出来る子だって先生達に聞いたから今度こそは頑張ろうね」

そつと点数を見ると、予想していたよりも更に悪かった。というか、割り算かけ算の基礎問題以外は全て不正解となっている。千鶴の登場でパニックになっていたことは事実だが、それでも現役の大学生でありながら、△学四年生用のテストで酷い点を取ってしまった現実は弘夢を心底辱めた。

「あら、ごめんなさい」

その時、更に間の悪い事に千鶴が手に持った答案用紙を床に落とす。

「あっ！」

ひらひらと宙を舞った一枚の紙は生徒達の方向に飛んでいき、弘夢の取った点数を皆の目にも露わにってしまった。

「うわあっ！24点だって！」

先ほどの小さな女の子が大きな声で叫んだ。

「これなら私の方が全然おりこうさんだよね」

女の子が78点と書かれた自分の答案用紙をみんなに自慢するように見せつけた。いくら問題が違うとはいえ、小さな女の子に馬鹿にされた弘夢は慌ててそれを拾い取った。

「やっぱり、あなた一年生からやり直した方がいいんじゃない？」

そう言ったのは先ほど弘夢達に絡んできた□学生の理香達だった。彼女は弘夢から答案用紙を奪い取って大きな声で皆に言い聞かせるように言った。

「あらら、二桁のかけ算さえ間違ってるじゃない。見てよ、ここに必死に筆算しようとした後があるけど、繰り上げるの忘れちゃってるしい！」

「か、返して！」

弘夢は取り繕ったが、女の子がその手を高く掲げてしまうと弘夢の身長ではジャンプしても届かない。

「あはは、碧依ちゃんだっけ、あなたその一年生の子に足し算から教わった方がいいわよ。まだ四年性のお勉強は早すぎたんだよね」

「それくらいにしておいてあげなさい」

千鶴が苦笑いしながらようやく割って入った。だがその口調は詩織と比べてあまりにも優しすぎ、理香達も簡単には言うことを聞かなかった。

「だって先生。この子下級生の癖に生意気なんだもん。目上の私達にタメ口とかきくんだよ」

「あら、そうだったの？」

千鶴は和やかな口調のまま話す。

「碧依ちゃん、上級生の言うことはきちんときかないといけませんよ。お姉さんだって好きで叱ってるんじゃないんですからね」

明らかにそれは教育ではなくイジメだったのだが、千鶴にはどうやらそうは見えていなかったらしい。

「分かったら先に碧依ちゃんからごめんなさいしようね。出来るかな？」

「えっ？・・・あ、あの・・・」

どう考えても自分は悪くない。そうは思いながらも弘夢は下級生として、それ相応の態度を取らなければならなかった。

「ほら、お姉さんに頭を下げて、ごめんなさいって言えるでしょ？」

千鶴の言質を得、理香と杏奈は腰に手を当てるような姿勢で勝ち誇ったように弘夢を見下ろしていた。悔しかったがこれ以上だだをこねても恥ずかしさが増していくばかりだった。弘夢はくぐもった声を絞り出す。

「……ご……ごめんなさい……」

「どうして謝るの？」

「え？」

「あなた本当に悪い事をしたっていう自覚があるの？じゃあどうして自分が私に謝っているのか説明してよ」

「そ、その……年上の……人に……失礼な言葉遣いを……」

「もうちよつとわかりやすく言つてよ。具体的にさ」

「え！？……あ……えつと……わ、わたしは……よ、四年生なのに……」

□学生の……そ、その……じよ……上級生に……え、偉そうな……言葉を……言いました……ごめんなさい……」

涙が零れそうだった。いくら四年性の振りをしていても弘夢は本当は大学生の男子なのだ。□学生の女の子に失礼な口のききかたをしましたなんて頭を下げるのは屈辱の極みだった。

「分かったわ。じゃあこれからはどうするの？」

「え？……ま、まだ……」

「なにが、ま……まだよ。反省してるんなら、自分で考えた言葉で言つてよ。これからはどういうふうに私達に接してくれるのかさ」

「あつ……え……えつと……こ、これからは……」

口にするのは躊躇われたが今の自分の立場を自身に言い聞かせ、弘夢は恥ずかしい言葉を口にした。

「こ、これからは……□学生のお姉さん達を……尊敬して……言うことをよくきいて……い、いい子になりますから……ど、どうか……あたし達を……か、下級生として……いろいろ教えて……下さい……」

「やれば出来るじゃない」

女の子はようやく手に持った答案を弘夢に差し出した。

「じゃあ返してあげる」

卒業証書でも手渡すような仕草で彼女は大きな声で言った。

「吉野碧依どの、点数24点。もう少しがんばりましょう。次に同じ様な点を取ったら△学一年生からやりなおしてもらいます」

部屋中のみんなが大きな声で笑った。

「ほら、受け取りなさいよ。それから私の言ったこと復唱してくれる？」

「そ、そんな・・・」

「さっき上級生の言うことをよくききますって言ったばかりでしょ。もう一度初めからやり直す？」

弘夢は青ざめて頭を振った。

「わ、悪い点数を取ってしまつて・・・ご、ごめんなさい・・・あ、あの・・・も、もう一度・・・こんな点を・・・点を取つたら・・・あ、あの・・・」

「ほら、早く！」

「も、もう一度・・・いい、い・・・いい・・・いち・・・一年・・・一年生から・・・やり直し・・・ます・・・」

消え入りそうな声で言った弘夢の目元から頬にかけて、とうとう本物の涙が流れ落ちた。

「もうそのくらいいいでしょ」

さすがに見かねたかのように千鶴が口を挟んだ。

「あなたもタメ口とか乱暴な言葉を使っちゃだめよ」

理香と杏奈の、はいという囁くような返事を聞き流し、千鶴は弘夢に一枚だけ残ったパジャマを手渡す。

「ごめんね。もうこれしか残ってないから、今日はこれを着て寝てね」

それは上着の全面にアニメのキャラクターがプリントされた幼女向けのパジャマだった。

第五章 オネショなんてしないもん

「それじゃあ、みんな着替えていいわよ。一人で出来ない子は先生に教えてね」千鶴はそう言い終えると、先ほどの一年生の子の上着を脱がし始める。その姿は少し若すぎるものの少女の母親のようだった。

「あの先生、保母さんになったほうがいいんじゃないかしら」

香澄の言葉に弘夢も頷いた。彼女はこうしてこんな英才教育の塾に就職を希望したのであると彼も不思議でならなかったのだ。

「わっ！」

その時、目の前で彩加が上着を脱ぎ去ったので弘夢は不意にそんな声を漏らしてしまった。飾り気の無いスポーツブラ姿の彼女は不思議そうな目で彼を見る。

「どうしたんだよ碧衣。そんなにブラが珍しいか？」

「あつ、いや・・・うらやましい・・・なって・・・」

弘夢は思わずそんなウソをついてしまった。

「あら、碧衣ちゃんはまだブラしてないの？」

その声に振り向くと、香澄までもが上半身をあらわにしていた。胸には大ききこそ無いが、可愛らしいリボンの付いたいわゆるファーストブラがしっかりと着けられている。

「う、うん・・・まだ無い・・・から・・・」

その姿を見ていられず弘夢は俯いて言った。まだ何も一生そんなもの付けないうと思いつながら、彼はなんとなく気恥ずかしさを感じていた。

「だよな。碧衣にはまだブラなんて早いよ。アニメ柄のパンツとかの方が似合いますよ」

「小さい頃そんなのも穿いてたわよね。懐かしいわ」

その会話に弘夢はドキリとした。今彼が穿いているのがまさにそのアニメプリントのショーツなのだ。

「どうしたんだよ、女同士なのに恥ずかしがってんのか？」

「い、いや・・・」

これ以上躊躇ってはいはかえって不審に思われる。弘夢は思いきってジャンパースカートの肩紐を外すと、ブラウスのボタンを迪々しく外していく。

「んふふ、可愛いキャミね」

中から顔をのぞかせたハートプリントのキャミソールを見て香澄が笑う。彩加もやっぱりブラはいらないねと弘夢の胸を見て同意するように言った。

『だから一生膨らむことなんてないんだってば』

弘夢は心でつぶやきながらパジャマの上着を羽織る。胸には派手な色遣いで、幼稚園児くらいの女の子に人気の魔法少女のキャラが描かれている。

ピンク色のそのパジャマは思いの外サイズが大きく、弘夢の小さな体にはちつとも窮屈では無かった。それどころか元々大きめに造られたパジャマの裾はお尻を隠すほど長く、そのシルエットはダブダブの服を着せられた小さな女の子にしか見えない。

『大学生にもなつてこんなパジャマを着るなんて・・・』

だがそれはある意味幸いでもあった。丈の長さのおかげでスカートのように下半身を隠しながら、彼は恥ずかしいショーツの柄を見られずにパジャマのズボンを履き終える事が出来たのだ。

「は、恥ずかしいよ・・・」

「大丈夫。とっても似合ってるよ」

「うん、碧依ちゃんにびつたりだわ。本当に妹みたい」

彩加と香澄が着替え終わった弘夢の姿を見て、微笑ましそうに言った。

「でも碧衣ちゃんって変な子ね」

「えっ？」

香澄のなんでもない呟きに弘夢は思わず聞き返してしまった。

「だって、下着が恥ずかしいのならスカート穿いたままでパジャマのズボンを穿けば良かったのに、わざわざ脱ぎ終わってから着替えるんだもん」

「あっ！」

言われて初めて弘夢は気がついたが、普段からスカートなど穿かない彼がそれに思い至らなかつたのは仕方が無い事でもあった。

「まあまあ、きつと家ではママに着替えさせてもらってるんだよな」

彩加が冗談交じりに言った。だがその声を聞きつけて、千鶴が三人の方を見て首を傾げた。

「あら、碧衣ちゃんも一人でお着替え出来ないの？」

「い、いえ、出来ます！もう一人で着替え終わりました！」

弘夢は慌ててそう大声で言ってしまった。

「あはは、一人で着替えましたなんて威張っちゃって。まるで幼稚園児みてー」
相変わらずの理香のイヤミが彼の耳に小さく届いた。

「じゃあ電気を消すからね。騒いだりしちゃ駄目よ」

時間はもう九時半だった。弘夢にとつてはとても寝付けない時間だが、下の学年の子達は既に眠そうな目をしている。

「それから一人で淋しくなったら、隣に先生達がいるからいつでも来ていいわよ」

「そんな奴、碧依くらいじゃねえの」

暗闇の中理香のそんな声が聞こえ、クスクスと押し殺す笑い声が響いた。

「それから、まさかとは思うけど、もしオネショしちゃったらそつと先生に言うて下さい。黙っていたら旅館の方の迷惑になりますからね」

先ほどよりも大きいドツという笑い声が暗闇に響いた。

「まさか、赤ちゃんじゃないのにオネショなんてしないよー」

「せんせー、私達もう△学生なんだから馬鹿にしないでよ」

「ごめんごめん。いくらなんでもそんな事ないわよね。じゃあおやすみなさいね」

千鶴はそう言うて出て行った。みんなは大丈夫だと言ってたけど、きっと一年生くらいだったら、両親と離れた不安からオネショしちゃう子もたまにいるんだろうなと弘夢は想像した。

パジャマは恥ずかしいけど布団に入ってしまったえば誰にも見られる事も無い。それよりもようやくスカートから解放された安堵感に彼はようやく落ち着きを取り戻しかけていた。

今日は大恥をかいてしまったけど仕方無い。僕だってもう少し思い出せば100点くらい取れる学力はあるんだ。だって僕は大学生なんだから。

弘夢はそう自分に言い聞かせたが、自己のプライドを保つだけの幼稚な言い訳を繰り返す事自体が、既に幼児じみた行為だと彼は気が付いていなかった。

そして、まさかこんな時間に眠れる筈が無いと思っていた彼だったが、不思議な事にすぐに眠気は押し寄せてきたのだった。

「トイレに行きたい！」

夜中、弘夢は目を覚ました。

「せんせい、おしっこ！」

彼は千鶴にそう叫んだ。彼女の身長は何故か山ほど高い。遙か天井からその優しい声が響く。

「あらあら、自分でオシッコって言えたのね。偉いわよ」

千鶴は弘夢の頭を撫でてから彼の手を引いてどこかへ連れて行く。尿意を告げるなんて当たり前じゃないかと思いがながらも、彼は股間の疼きに下半身を押さえる。

「えっ？」

弘夢はようやく自分がスカートを穿いていることに気が付いた。それも紺色の制服風ブリーツスカートだ。傍にあるガラス扉に移った自分を改めて確認すると、ピンク色のだぶだぶした上着に吊りスカート。どう見ても小さな女の子の格好だ。

「ね、ねえ、どうして僕こんな格好なの？」

「おかしな事をいうのね、碧依ちゃんは」

碧依ちゃん？僕は三谷弘夢の筈だ。弘夢は混乱する。自分は大学生の男子の筈なのに何をしているのだろうか。

「ほら、おトイレにつきましたよ。シーシーしましうね」

パステル調の壁で仕切られたトイレには個室さえ無かった。どう見てもここは幼稚園のトイレだ。それも恐らくまだオムツの取れない子用のトイレトレーニングに使用するトイレに違いなかった。

「じゃあパンツ脱ぎましょうね」

千鶴が弘夢のスカートに手を差し入れた。

「な、何をっ！」

「オシッコするんでしょ、ほら」

「うわっああっ！！」

たちまち弘夢の体は持ち上げられた。彼の両足は千鶴に抱えられ、母親が子供にオシッコを促す、股を開かせた姿勢で彼は便器の上で千鶴の声を聞いた。

「はい。しーしー出るかなあ？しーっ・・・しーっ・・・」

「えっ！？えっ！？どうしてこんな・・・い、いや・・・いやだよっ！」

叫びながらも尿意は抑えられなかった。弘夢は千鶴に抱きかかえたまま股間から黄色い液体を勢いよく放出してしまう。

「わあああっ！！！！」

気が付けば旅館の天井が目に飛び込んできた。弘夢はすぐに自分が合宿に参加させられた事を思い出す。

窓の外はほんのりと明るく、鳥たちの鳴き声が微かに聞こえる。それにしても酷い夢を見てしまった。それもこんな恥ずかしいパジャマを着せられたせいには違いない。

少し早いけどみんなより先に起きよう。そう思って体を起こそうとした彼は下半身のおかしな感触に気づく。

『あ、あれっ・・・』

お尻全体がぐっしりと濡れている。その気持ちの悪い感覚に彼は蒼くなった。

『う、うそっ!?!』

布団を捲った彼の目に飛び込んできたものは、疑いようもない布団に書かれた世界地図だった。ほんのりと湯気の立つそれは、つい先ほど彼が漏らしたばかりだと言うことを暗示していた。

「そ、そんな・・・ど・・・どうしよう・・・」

昨日以上のパニックが彼を襲った。逃げてしまう事は出来ない。誰かの布団と取り替えてしまう?・・・いや、パジャマも完全に濡れてしまっている。正直に先生に・・・まさか千鶴にそんな事を言える筈も無い。だが黙っていても知らない筈が無かった。なにしろ湯気を立てたシミからはほんのりと尿の臭いさえ漂っているのだ。

「どうしたんだよ、碧依?」

声を掛けられ、弘夢はビクリと肩を振るわせる。声の主彩加は眠そうな目を擦りながら布団から這い出てきた。

「あ、彩加ちゃんどうしよ・・・」

思わずそんな言葉が出てしまった。年下の少女に頼るなんて耐えられなかったが、千鶴や、ましてや□学生の女の子に告白するよりはマシだった。今の彼にとって二人の『おともだち』が唯一の心の支えだったのだ。

「あっちゃー」

さすがの彩加も口を手をあててはつの悪そうな表情を浮かべた。

「碧依、まだ治ってなかったのかよ」

「そ、そんなじゃないよ」

弘夢は小声で反論した。

「とにかく、あいつらにばれないように片付けないと大変だぞ」

あいつらとはもちろん理香と杏奈の事だ。弘夢ももちろん同じ思いだった。

「とにかく、先生に言ってきたよ」

「で、でも・・・」

「恥ずかしがってても仕方ないだろ。濡れた布団をそのままにしておく訳にもいかないし・・・」

「う、うん・・・」

そう言って立ち上がった弘夢の太ももを内股に残っていたオシッコが滴り落ちる。その恥ずかしい感触は、彼に自分がオネシヨをしてしまったという事実を否応なく突きつけた。

「や、やっぱり・・・やだ!」

こんな姿を千鶴に晒す訳にはいかない。弘夢は本当にオネシヨをしてしまった

子供のように駄々をこねた。
「仕方ないだろ。オネショしたのは碧依なんだから。まったく、言っておいてくれたら夜中に起こしてやったのにさ」



「これは違う！僕はオネショなんてしないんだから！本当だから、△学校に上がってから一度もオネショなんて！・・・」

弘夢は彩加の言葉に思わず大きな声で言い返してしまった。

「ん？どうしたの・・・もう朝？」

慌てて口を押さえても遅かった。部屋中の大半の生徒達が目を擦って何事かと布団を捲り上げていた。

「あっ！・・・い・・・いやっ・・・そのっ・・・」

弘夢はもう一度濡れた布団の上にお尻から崩れ落ちた。

「あーっ！碧依ちゃんオネシヨしちやってるー！！」

一年生の子が叫び、あっという間に部屋はもの凄い騒ぎになってしまった。

「あーあ、まさか本当にオネシヨしちゃうなんて思わなかったわ。あんたには一年生さえまだ早いみたいね。幼稚園、いや保育園からやり直した方がいいんじゃないかしら？」

そんな風に嘲笑する杏奈の言葉も、もう弘夢の耳にはうつろにしか聞こえなかった。

「まあまあ、大変ね」

騒ぎを聞きつけてやってきたのは、悪い事に千鶴だった。

「みんな、碧依ちゃんの事笑ったりしちゃう駄目よ。みんなだって幼稚園の頃はオネシヨしたでしょ」

「そんなのしなかったよ。幼稚園の頃には治ってたし。それにそいつもう四年生なんだよ」

「四年生って言っても碧依ちゃんは寂しがりやさんなのよ。きっとママが恋しかったんだね。一人でおねんねするのは初めてだったの？」

そんな風に言われても弘夢には答えようが無かった。彼の母親は仕事人間で、物心ついてから一緒に眠った覚えさえ無いのだ。だが千鶴は一人納得したように頷いた。

「でももう大丈夫よ。あたしの事をママだと思って甘えてくれたらいいからね」千鶴はそう言って弘夢の頬を両手で覆った。こんなに間近で若い女性と向き合うのは初めてだった。本当に自分だと気が付いていないのだろうかという想像を彼は必死に打ち消す。

「ご、ごめんなさい・・・淋しかったから・・・」

言い訳をしても失った恥は無くならない。仕方無く弘夢は寂しがり屋の女の子を演じる事を決意した。

「そう、じゃあ仕方ないわね」

千鶴はにこりと弘夢に微笑みかけた。その笑顔に彼は忘れかけていた母親の笑

顔を思い出す。

「ほら、たっちできる？」

まるで幼児に言うように聞かれても、今の弘夢には逆らいようも無かった。彼は濡れたパジャマのまま立ち上がる。

「とりあえず濡れたパジャマは脱ぎ脱ぎしましょうね」

「あっ！」

弘夢が抵抗する間もなく、千鶴は彼のパジャマのズボンを下げてしまった。彼は股間を見られないように慌てて彼女にお尻を向けた。

「あらあら、ショーツまでびしょ濡れね」

弘夢は慌てた。このままではショーツまで脱がされてしまうかもしれない。そうならば男の子だということが皆に知られてしまうのだ。

「ほら、こっち来なさい」

だが千鶴は次の瞬間意外な行動に出た。

「優しいだけがママじゃないのよ。悪い子にはオシオキも必要だからね」

そう言っただけ千鶴は自分の膝が濡れるのも構わず、弘夢を膝の上に俯せに乗せてしまった。

「な、なにをするの!？」

弘夢の叫び声が部屋一杯に響く。

「オシオキだつて言ったでしょ」

千鶴は一言そう答えて彼のショーツを膝までずりおろした。まだ小さな少女と見まがうような真っ白なお尻が露わになるが、小さなペニスも千鶴の膝の上にかろうじて隠す事が出来た。

「痛いけど我慢するのよ」

だが千鶴はそのまま振り上げた右手を振り下ろす。

「パッシーン!!」

乾いた音が響き、同時に弘夢の口から悲鳴が零れた。

「いたあああいつ!!」

お尻叩きなど生まれて初めての経験だった。それも同級生の女の子に、年下の子達の前でされるなんて想像もしていなかった。

「パッシーン!!」

だが休む間もなく千鶴は彼のお尻を打つ続けた。みるみる間に彼の尻は真っ赤に腫れ上がり、その悲鳴は涙声になっていく。

「いたいよおっ・・・も、もうゆるしてえっ・・・」

「パッシーン!!」

「ひ、ひいいいっ!! お、お尻が焼けちゃうよおっ!!」

「パシーンンン!!」

「うわああん!! 助けてえっ!! 許してえっ!!」

「パーシンツ!!」

「ううううっ・・・お願い・・・お願いだから・・・」

「パーン!!」

「あひいいいっ・・・も・・・もう許し・・・」

「パンンンツ!!」

「うぎいいいっ!! も、もうオネシヨなんてしないからあ!!」

その声を聞いて千鶴はようやくその手を止めた。

「ホントにオネシヨしない？」

「う、うん。本だよ。もう絶対にしないから許して」

あまりの尻の痛みに恥も外聞も無く、弘夢はそう言って懇願した。

「そう、分かったわ。それを自分から言ってくれるのを待ってたのよ。四年生にもなってもオネシヨしちゃうのがいかに恥ずかしい事かって、碧依ちゃんが自覚できるのをね」

「じゃ、じゃあ、もう許してくれる？」

「そうね。許してあげてもいいけど・・・」

千鶴は口に指をあてて考える振りをした。弘夢は膝に乗せられたまま不安げな表情で首を曲げ、彼女の表情を仰ぎ見る。

「それじゃあ約束してくれる？」

「えっ? 何を？」

「碧衣ちゃんが私の小さな妹、いや私の赤ちゃんになつてくれるって」

「ふへえっ？」

おかしな音が弘夢の口から漏れ出た。千鶴は少し恥ずかしそうな顔をして続ける。

「私ね、碧衣ちゃんの事とっても気に入っちゃったんだ。だからしばらくの間でもいいから私の赤ちゃんになつてほしいの」

「だ、だってぼ・・・あたし・・・」

「もう四年生だって言いたいの? 違うでしょ。オネシヨするような子が四年生の筈ないじゃない」

千鶴の声は先ほどと全く変わらない優しい響きを帯びている。だがそれだけに弘夢は冗談では無いという恐怖を感じた。

「ね、いいでしょ。碧衣ちゃんは何も心配しないでいいんだから」

「で、でも・・・やっぱり・・・赤ちゃんなんて・・・」

「オネショしちゃったくせに何を今更お姉ちゃんぶってるのよ。碧衣ちゃんだつて本当は望んでるんでしょ？」

「あたしが？・・・赤ちゃんに・・・そんなこと・・・」

千鶴のその言葉に、弘夢の頭の中で何かが激む。赤ん坊・・・自分が・・・僕は・・・私・・・違う・・・四年生だもん・・・いや・・・違う・・・僕は・・・やだつてば！！」

気がつけば弘夢は両手を振り回していた。だがその爪の先が千鶴の髪にあたり、彼はぎよつとして正気を取り戻す。

「ふーん」

千鶴はほんの一瞬だけ顔を顰めると、弘夢の耳元で囁いた。

「じゃあ仕方無いわね、あなたには無理矢理にでも赤ちゃんになつてもらおうわ」「えっ！？」

「これでオシオキきはおしまいにしておける。自分でパンツ穿けるよね」

千鶴は弘夢では無く他の生徒達に向かってそう宣言すると、驚いた事に彼をその姿のまま膝から下ろしてしまった。

「わあああああつっ！！」

慌てて両手で股間を隠したが遅かった。彼の股間についていた僅かばかりのものは、同じ部屋の女の子全員にしっかりと見られてしまった後だった。

「あつ・・・あつ・・・こ、これは・・・」

「見ての通り、碧衣ちゃんは男の子だったのよ」

千鶴は茫然自失となった弘夢の後ろに立ち、彼の手首をお尻の部分で締め付ける。再び粗末な股間のをあらわにして、抵抗も出来ずに彼はその場に立ち尽くした。

「ちよ、ちよつと！信じられないわよ！男子のくせに女の子の振りしてるなんてさ！」

理香がまず大きな声で彼を糾弾した。

「昨日私達の着替えとかも見てたんじやないの。ヘンタイ！」

他の生徒達も口々にひそひそ声で話す。

「男の子のくせによくあんな可愛い服着てたわよね」

「そうそう、私達女の子でも着るのが恥ずかしい服だったもんね」

「見てみて、しかもあのショート。アニメプリントなんてまるで幼稚園児みたい」

「でもちつとも分かんなかったよね。本当に男の子なのかしら」

その少女の発言で、皆が一斉にもう一度彼の股間を注視した。

「み・・・みない・・・でえっ・・・」

弱々しい言葉を吐き抵抗を続ける彼だったが、千鶴に固定された体はびくとも動かなかった。

「そうよね、一応ついてるもんね」

「これが男の子のなんだ、私初めて見ちゃった」

「でも何かパパのと違うね。パパのつてもっとおつきくてもじゃもじゃだよ」

まだ陰毛一本さえ生えていない股間を一年生の少女が指さして不思議そうな顔をした。

「それはね、まだこの子のオチンチンが子供だからよ」

千鶴は相変わらずの調子で皆に説明する。

「男の子はね、大人になると、いやお兄さんになるとオチンチンの周りに毛が生えて、その先の皮も剥けてきちゃうの。もちろん大きさもずっと大きくなるのよ」

「剥けるってどういうこと？」

「碧衣ちゃんのおチンチンの先をよく見てみて。だぶっとした皮が余ってるでしょ？」

「ほんとだよ」

弘夢の前に集まってきた少女達が声を張り上げた。

「その余っている皮がね、だんだんと捲れてきて中から大人のオチンチンが顔を出すのよ。大人になった証にね」

「じゃあ碧衣ちゃんはまだ子供オチンチンなんだね」

弘夢の頬がカーツという音を立てそうなくらいに赤く染まる。

「ち、ちがう・・・これは・・・僕は・・・」

「気にしないでいいのよ、碧衣ちゃんは赤ちゃんだもん。剥けて無くて当たり前よ」

「そ、そんな・・・僕は・・・赤ちゃんなんかじゃ・・・」

「そんなの気にしないでいいよ」

年長の少女達が戸惑う中、前へ歩み出てきたのは彩加だった。

「あ、あやか・・・ちゃん・・・」

弘夢は申し訳なさそうに顔を背けた。千鶴に無理矢理ばらされたとはいえ、彼女達を騙していたのは自分なのだ。だが彩加はちっとも怒っている雰囲気は見せなかった。

「気にするなよ。女だって男だって碧衣は碧衣だもん。それにその剥けてな

いチンチン可愛いぜ。あたしの兄貴なんて、二つしか違わないのにもう剥けちやってるもんな」

二つ違いということは碧衣の兄もまだ△学生に違いない。そんな小さな男の子でももう剥けているのに、自分がこんな風に包茎のペニスを女の子達に晒している現実を弘夢は受け入れる事が出来なかった。

「ち、違うの・・・これには・・・」

「まだそんな事言ってるのかよ。折角あたしが気にしないっていつてるのに」

「そ、それは・・・」

彩加の言うことはもつともだった。これ以上言い訳をしてもどうしようも無い。皆がこの事実を認めた上で許してくれるなら、この場を逃れるこれ以上の手段は考えられなかった。

「ほ・・・ほんとに・・・許して・・・くれるの・・・」

「ああ。碧衣はあたしの妹分だからな。なっ、香澄？」

振り向いた彩加に向かって香澄も大きく頷いた。

「みんなもいいよね。碧衣が男だって女だってちつとも構わないだろ。だってこんなに可愛いんだもん」

「うん、いいよ。碧衣ちゃんとっても可愛いもん」

彩加の足下で一年生の少女がそう言った。その声につられて年長の少女達も仕方なさそうに言う。

「まあ今更怒っても仕方無いわね。それに男の子と一緒に泊まったなんて知られたらこっちの方が恥ずかしいもんね」

もし弘夢のペニス剥けきったグロテスクなものであったなら、こうはいかなかったかもしれない。だが結果として彼はその子供のようなオチンチンのおかげでその場をしのごうできたのだった。

「良かったわね。みんなにお礼を言わないとダメよ」

千鶴がそう言うてようやく彼の手を離れた。

「ご、ごめん・・・みんな・・・ありがと・・・」

泣きじゃくる弘夢に向かって小さな女の子達は何故か拍手を送っていた。

だが円満に解決したかのように見えたその場にも納得していない者が二人いた。例の□学生の二人組である。

第六章 オムツをあてておきましょう

「ほら、いつまでオチンチン出してるの。早くしまいなさい」

千鶴に言われて弘夢は慌ててショーツを穿き直した。だがオシッコで濡れたショーツが股間に張り付いて、気持ち悪いことの上無い。

「ねっ、濡らしてしまったら気持ち悪いでしょ。オネショぐせがあるなら言いなさいって昨日言ったのに」

「そ、そんなの・・・無いもん・・・」

「小さな子はみんなそう言うんだよな。もうオネショなんてしないもん、っつさ」

彩加がからかうように言った。

「でもこれからは碧衣はみんなの妹だからな。遠慮せずになんでも話してくれていいからな」

「ぼ、僕が・・・みんなの・・・妹？」

「だってそうだろ。先生の赤ちゃんになるなら、私達にとつて妹みたいなもんだよ。それもまだオネショしちゃうような小さな妹だよ」

「私もお姉ちゃんだよ」

一年生の子が嬉しそうに言った。千鶴は満面の笑みを浮かべて嬉しそうに話す。

「そうよ、今日から碧衣ちゃんはみんなの可愛い妹ね。いつも優しく時には厳しく女の子として躡けてあげてね」

「そ、そんな・・・」

目の前の大勢の少女達は本当は弘夢よりもずっと年下の子ばかりの筈だ。それなのに自分の方が妹扱いされるといふ屈辱に弘夢は足を震わせる。

「じゃあそろそろお着替えしましょうね」

そんな弘夢の様子を満足そうに見て千鶴は皆に言った。

「今日のお洋服も昨日と同じように選んでもらいます。ただし碧衣ちゃん・・・」

「えっ？」

「碧衣ちゃんだけは、みんなに着る服を選んでもらいます。みんな、碧衣ちゃんに似合う可愛いお洋服を選んであげてね」

「はーい」という声が部屋の中に大きく鳴り響いた。

「い、いやだよおっ！もういいじゃないか！僕が男の子だって知ってるんだから、男の子の服を着させてよおっ！」

情けない弘夢の声を聞き、千鶴は彼を叱責するように言った。

「ダメよ、さつきも碧衣ちゃんはみんなの妹だって言ったでしょ。そういう事にしておかないとみんなにも迷惑がかかるし、もし碧衣ちゃんが男の子だって他の先生に知られたら大変な事になるわよ」

弘夢はうなだれる。千鶴の言うことはもっともだった。

「ねっ、言うことを聞いてくれるならあたしだけの秘密にしておいてあげる」その言葉に仕方無く弘夢は頷いた。千鶴はまだ自分が同級生だと気がついていないのだろうか。それにしても初めから男だと言うことは知っていたみたいだけど・・・だが彼にはその事を問いたす勇氣は無かった。

「せんせー！碧衣ちゃんの洋服が決まりましたあつ！」

先ほどから用意された沢山の洋服を物色していた女の子達が大きな声を張り上げた。それは塾側が用意した今日のレクレーションの為の衣服であり、当然ながらどれもが△□学生の女の子が着るようなものばかりだった。

「可愛いを選んでくれた？」

「はい、とっても碧衣ちゃんに似合うと思います」

代表して香澄が千鶴にひと揃いの衣装を手渡す。うさぎのイラストの描かれたピンク色のチュニックっぽい上着。胸元にはフリルがついており、肩の付け根は愛らしさをアピールするようなパフスリーブになっている。

ボトムはピンクと黄色の明るい色を基調としたプリーツスカート。丈の短さがこちらも子供らしさ全開といった感じだ。

「ま、また・・・そんな服・・・着ないといけないの・・・」

弘夢は恥ずかしさで卒倒しそうになった。

「そうよ、折角お姉ちゃん達が選んでくれたんだもん。さあ、お着替えしませうね」

「せんせい、あたしも手伝う！」

一二年生の小さな子が弘夢の周りに群がる。きっと自分より下の存在が出来た事が嬉しくてたまらず、その世話を焼きたいのだろう。

「ありがとうね。じゃあ、碧衣ちゃんのパジャマを脱がしてあげてくれる？」

「自分で出来ますっ！」

慌ててそう言った弘夢だったが、当然千鶴は許してくれなかった。

「ダメよ、お姉ちゃんの言うことはちゃんと聞きなさい。そうしないと・・・」
「・・・う・・・ううっ・・・わかり・・・ました・・・」

弘夢は改めて自分の立場を思い知らされた。だが千鶴は更に彼を辱める。

「分かっただらお願いしなさい。お姉ちゃん、あおいのおようふくを脱がして下

さいって」

「そ、そんな・・・」

「あら、そんなに聞き分けの無い子なの、碧衣ちゃんは？私一人じゃ手に負えないから、詩織先生を呼んでこようかしら・・・」

「・・・分かりました」

千鶴という少女が優しい顔をした悪魔だと言うことを弘夢はようやく理解した。

「あ、あの・・・」

仕方無く彼は自分よりも遙かに小さな少女に向かって恥ずかしい言葉を口にした。

「なあに、あおいちゃん？」

「あの・・・あ、あたしの・・・お、おようふくを・・・ぬがして・・・ください・・・」

「はい、よく言えました」

二年生の少女が背伸びをして碧衣の頭を撫でた。

「まあ、今日のお洋服もよく似合ってるわよ」

皆に手伝わされてようやく着替え終えた弘夢を見て、千鶴が感嘆の声を漏らした。

「は、恥ずかしい・・・」

どこから見ても小さな女の子用の洋服に身を包み、弘夢は身をくねらせるようにして全身を真っ赤にしていた。自分でするなら一分もかからない着替えだったが、小さなお姉さん達に手伝われた為に、たっぷりと恥ずかしい着替えの時間を皆に見られてしまった後だからそれも仕方無かった。

「せんせー、これはどうしますか？」

彩加が透明のポリ袋を手にとって叫んだ。中には黄色く染まった布きれが入っている。

「あっ！彩加ちゃん、きたないよっ！」

弘夢は慌てて彩加からその袋をもぎ取った。もちろんその中身は彼が汚してしまったシャツだったからだ。

「妹のお漏らしパンツなんて汚くないよ。それより今日の下着はどうするのさ？」

弘夢はおそろのおそろ千鶴の方に振り返る。濡れた下着を脱がされ、彼は今パンツなしのままスカートを穿いていたのだ。

「そうね、どうしようかしら。着替えのパンツは用意してないし・・・みんな

はどうしてるの？」

塾側の用意していたのは上着だけだと聞いていた。千鶴は彩加達にそう尋ねた。

「下着は自分で用意するようにってパンフに書いてあったよ」

彩加はそう言って自分の鞆を持ち上げて見せた。

「だから一応こうやって小さな鞆だけは持ってきたんだけど・・・そういうえば彩加も鞆持ってたよな。あの中に替えの下着入ってるんじゃない？」

「い、いや・・・あっ！」

弘夢は昨日の出来事を思い出す。確かに替えのショーツは入っていた。だがそれは昨日既に彼が履き替えてしまっていた事も。

「碧衣の鞆ってこれでしょ？」

遠くから声が聞こえた。見れば理香が碧衣から受け取った弘夢の鞆を両手に持って高く掲げていた。

「中確かめてあげるよ」

「だめっ！開けちゃだめえっ！！」

「ガキのくせに隠すもんなかないでしょ。どれどれ持ち物検査しましょうね」理香はほんの嫌がらせで彼の鞆を開けたに過ぎなかった。だがその中から出てきたものは彼女たちの予想以上に弘夢に恥辱を与える事になってしまった。

「なんだこれ？」

鞆を物色していた少女は、その中に先ほどと同じビニール袋に包まれた物体を見つけてしまった。

「うわああっ！これパンツだ！濡れたパンツだ！きたねえっつ！！」

数秒後そう言って彼女は弘夢が昨日濡らしてしまったショーツを投げ捨てた。

「ちよっとー、昨日も濡らしてしまってたの？あんた本当に赤ん坊みたいね」

「そ、それは・・・」

弘夢は弁解しようとしたが、まさか『それは精液で』などと言える筈も無かった。

「えーっ・・・お漏らし？・・・オネシヨだけでもびっくりなのに・・・」

「でも見てよ、どう見ても濡れちゃってるし・・・外で漏らしちゃって自分で洗ったんじゃない？」

「四年生にもなってお漏らししちゃう子っているんだね。あたし初めて見たわ」口々に罵る声が聞こえるが弘夢にはどうする事も出来なかった。

「替えの下着が無いなら仕方無いわね」

しばらく自身も驚いた顔をしていた千鶴だったが、彼女はすぐに何かを思い出したように一度部屋を出て行った。

「なあ、碧衣。ウソだよな。いくらなんでもお漏らしなんてしないよな」
お漏らしではなく射精だと知れたら大変な事になる。彩加の慰めにも彼は否定する事が出来なかった。

「じゃあ普段はどうしてるの。△学校とかでも漏らしちゃうの？」
今度は香澄が彼に尋ねる。だがそんな言葉の一つ一つが彼の心に突き刺さった。

「お待たせ」

しばらくして千鶴は小さな袋を手に抱えて戻ってきた。

「こんな事もあるかなと思って一応用意してたんだけど・・・」

彼女はそう言ってビニール製の包み紙を破る。

「今日はこれ下着代わりに穿いておいてくれる？碧衣ちゃんにびったりのパンツでしょ？」

「あつ、オムツだあつ！！」

一年生の子が大きな声で言い、再び彼は部屋の少女達皆に囲まれてしまった。

「あたし知ってるよ。幼稚園の妹がまだ寝るときはママにしてもらってるもん」
女の子は自慢するように千鶴の持った紙おむつを指さした。

「ねっ。ちよつと恥ずかしいけど、これ穿いたら安心だからね」

千鶴は優しげながら、拒否は許さないという口調で弘夢にそう告げた。

「オ・・・オムツ・・・それを・・・僕が・・・」

昨日から数々の恥辱を受けてきた彼だったが、今の状況は極めつけだった。女児用の服装だけならともかく、女児用のショーツならまだしも、目の前に翳されたピンク色の下着は下着と呼べるものでさえなく、言葉もろくに話せないまだ母親にオシッコと告げる事も出来ない赤ん坊が身につけるものなのである。

「そうよ、最近は大きいサイズのもあるから、これなら碧衣ちゃんでも穿けると思うの」

ちらりと確認するとオムツの前部分には「まえ」という文字と『ビッグより大きいサイズ』と書かれている。パンツタイプのその下着は恐らく赤ん坊と呼ばれるよりも大きな子供用のものなのかもしれないが、それでもオムツには変わりなかった。

「や、やだ・・・それだけは・・・」

逆らっても無駄だと分かかっていてもそう言わざるを得なかった。いくらなんでも大学生にもなってオムツだなんて死んだ方がマシなくらいの恥辱だった。

「ダメよ。わがまま言っちゃ」

千鶴の代わりに二年生の少女が話す。

「お漏らししちゃうならオムツしないといけないでしょ。オシッコでお部屋を汚したらおそうじするのが大変なのよ」

すらすらと少女は話す。千鶴が彼女を褒めると少女はこう言った。

「うん、あたしもまだお漏らしするいもうとがいるから知ってるんだよ。いもうとはね、自分ではおもらししない、オムツなんてお友達に見られたら恥ずかしいっていうけど、いっつもおもらしちゃうって幼稚園の先生に叱られてるの」

「そう、困った妹さんね」

千鶴はそう言うってから弘夢に向き直った。

「碧衣ちゃんはそんな聞き分けの無い子じゃないわよね。先生の言うこと聞いてオムツあててくれるよね？」

彼女はじつと弘夢の目を見据えた。

「あっ・・・あっ・・・あのっ・・・」

しばらく悩んでから弘夢は小さく返事をした。

「やっぱり・・・いやです・・・お漏らしなんて・・・お漏らしなんてしないから、オムツだけは許して下さいっ！」

「あらあら、こんなに言うこと聞かない子だなんて思ってた無かったわ」

千鶴は心の底から呆れたような声を出した。

「さっきのお話聞いたでしょ。お漏らしする子はみんな、自分では大丈夫、もうパンツのお姉ちゃんだって言うの。まあ気持ちは分からなく無いわよね。自尊心の芽生える年齢だし、お友達はみんなもうパンツなのに自分だけがオムツだなんて赤ちゃんみたいだもんね。でも・・・」

千鶴は少し声のトーンを下げた。

「碧衣ちゃんは分かってくれるよね。だって碧衣ちゃんは幼稚園児なんかじゃなく、大学生の男の子なんだもんね」

「うあああああっ!!」

やはり千鶴が全てを知っていた事を弘夢はようやく知った。

「え？せんせい、なんて言ったの？」

幸いにも最後の言葉は弘夢の叫び声にかき消されて皆には聞こえずに済んだらしい。

「えっとね、碧衣ちゃんは実はね・・・」

「穿きます！そのオムツ穿きますからあ・・・」

もはや弘夢はそう言うしか無かった。

「はい、あんよしっかり上げてね」



足下では二年生の少女がオムツを広げて弘夢を仰ぎ見ていた。彼は躊躇しながらもその中に右足を通す。

「はいよくできました。次はこっちのあんよ上げようね」

手慣れた様子で少女は弘夢にそう言って笑いかけた。プライドの全てが碎け散りそうになる思いの中、彼はもう片方にも足を通す。

「はい、じゃあオムツ穿きましようね」

少女はオムツの両脇に手を当てたまま立ち上がる。同時に弘夢の足首から太ももまで、またぐりのフリルが内股をくすぐる恥ずかしい感触がゆっくりと伝わった。

「ちよつとスカート捲っててくれる？」

年下のお姉ちゃんの指示にもう彼は逆らえない。黙って頷くと、弘夢は穿かされているプリーツスカートの裾を持ち上げてお臍の前で固定する。

「そのままじつとしてね」

少女は裸だった弘夢の股間にオムツをすっぽりと被せてしまう。千鶴の言うようにそのサイズはちつとも小さくなく、むしろ余るような感じがオムツのぼつてり感を演出してそのシルエツトを可愛く見せていた。

「へんなのがついてるけどいいじようぶ？」

少女はオムツの上から弘夢の股間を押さえた。思わず体を固くしてしまった彼に千鶴が笑いかける。

「妹さんにはそんなのはついてないもんね。ダメよ固くなんかしちゃ」
最後の言葉は少女には通じなかったが、弘夢を辱めるには十分だった。

「お股もきつくくない？」

少女は弘夢の股ぐりに指を入れてギヤザーを確認する。

「あんまりお転婆すると漏れちゃう事があるからね。ずれちゃったらお姉ちゃんに言うのよ。直してあげるからね」

弘夢は黙って頷くしか無かった。

「じゃあ謝りにいきましようか？」

「えっ？誰に？」

ようやくオムツを穿き終えた後、千鶴にそう言われ弘夢は驚いた。

「決まってるじゃない、旅館の人によ。お布団汚しちやったのは誰なのから？」

「あっ・・・で、でもっ・・・」

弘夢は狼狽した。これ以上この姿を他人に見られるのは耐えられない。しかも相手は塾と関係ない一介の旅館従業員なのだ。

「あ、あたしも・・・行かないといけないの？」

「決まってるじゃない」

千鶴は呆れたように言った。

「これがまだ一年生か二年生の小さな子ならともかく、四年生の子が汚しちやったなんて言ったら申し訳が立たないでしょ」

そんな事言わなければ分らないと思った弘夢だったが、とても口には出来なかつた。

「分かつたら先生についてきて。碧衣ちゃんは良い子だからきちんとごめんなさい出来るよね？」

「う、うん……」

そう答えた弘夢は、千鶴に手を引かれるようにして部屋から出て行かされてしまった。

「ね、ねえ……」

二人きりで旅館の長い廊下を歩きながら弘夢はようやく口を開いた。

「ど、ど……どうして……このアルバイトを……」

それでも直接自分の事を聞くことは出来なかつた。千鶴はしばらく考えてから答える。

「そうね、小さな子が好きだからかな」

「そ、それで……あの……ぼくの……」

「そうね……とっても驚いたわ」

千鶴は苦笑しながら答えた。

「生徒達の中に同級生そっくりの女の子がいるんだもん。初めは他人のそら似だつて思つたわ」

弘夢は頬を赤くする。

「でも声とか動作とかも知ってる人と同じだし、名簿を見れば住所も近いしね。これは何か事情があるなつて思つちやつたの」

不思議な事に弘夢はほんの少し嬉しくなつてしまった。自分の動作までもを千鶴が見ていてくれたことに關して……。だが彼はすぐにその思いなんかどこかに飛んでいってしまう。

「だけど甘えちゃダメよ。今は私はバイトだけどあなたの先生。あなたは私の小さな生徒。それも四年生にもなつてお漏らししちゃうとつても手のかかる生徒ね。三谷弘夢くん？」

改めてそう言われて彼は全身を上気させてしまった。

廊下を歩く度に股間のオムツが擦れて僅かな音を立てるのが恥ずかしい。あこがれていた女の子と初めての二人きりなのに、小さな女の子の洋服を着てオムツまであてられているなんてこんな恥ずかしい仕打ちがあるだろうか。

ところが千鶴の方はなんと無い様子で、十数センチは背の低い彼を見下ろして言った。

「大丈夫よ、その格好とっても似合ってるから。私の言うことを聞いてくれれば学校みんなにもばらさないでいてあげる。もちろん、あなたの教え子の本物の碧衣ちゃんにもね」

「っ！！」

どうして彼女がそこまで知っているのかは分からなかったが、もうそれ以上弘夢は聞き返す事が出来なかった。気がつけば目の前に昨日の従業員が立っていたからだ。

「あら、どうされました？ なにかありましたか？」

昨日と同じように不機嫌そうな様子で曜子という従業員が千鶴に尋ねた。

「ええ、申し訳ありません。実はこの子がオネシヨをして布団を汚してしまつて」

「まあ、オネシヨですか？」

改めて他人に説明されると顔から火が出るようだった。曜子は弘夢に気を遣う気もなく繰り返した。

「オネシヨですか。こんな大きな子がオネシヨするなんて珍しいですね」

「はい、普段からオネシヨ癖があったみたいなんですけど、恥ずかしがって言えなかったみたいで」

否定しなかったが、曜子の怖い顔を見れば言い返す事など出来なかった。

「仕方ありませんね。まあ小さな子のする事ですから処理はこちらでしておきます。どうか気にしないで下さい」

曜子は微笑むでもなく千鶴にそう言った。その曜子の言葉に胸をなで下ろした弘夢だったが、彼女は今度は弘夢の方に向き直った。

「あなた、何年生になるの？」

「あつ・・・はつ・・・はいっ！・・・よ、四年生です・・・」

射すくめるような目に、弘夢は素直にそう返事をしてしまった。

「そんな歳だったら、オネシヨしたらどれだけ迷惑がかかるか分かるでしょ？ どうしてオムツして眠らなかつたの！」

「そ、それは・・・その・・・」

「まあ従業員の私が叱る事じゃないかもしれないけど、私妹が三人もいるからついついこういうのを放っておけないんです」

再び千鶴に向かって曜子はそう言った。

「老婆心ですけど、こういう子は優しくしているとつけあがってしまいますわよ。大体にして大きくなってオネシヨする子なんて、母親に甘える気分が抜けていない証拠ですからね」

曜子は弘夢を睨み付けながら言った。

「あのー・・・私もそう思ってます・・・」
千鶴が遠慮がちに言う。

「ほら、碧衣ちゃん。スカート捲ってみせなさい」

「え！？こ、ここで！？」

「決まってるでしょ。あたし達はこのお姉さんに謝りに来たのよ」

「で、でも・・・」

「さっさとしなさい。それとも私にしてほしいの？」

「わ、わかり・・・ました・・・」

弘夢は仕方無く廊下の真ん中でスカートを捲り上げた。

穿かされたばかりのピンク色のオムツがあらわになり、曜子は少しだけおかしそうな表情をした。

「あら、あなたも若いのに分かってるじゃないの」

彼女は馴れ馴れしく千鶴に微笑んだ。

「あなたいい先生に恵まれたわね。そうよ、そうやって十分に恥をかけば、次からは絶対にオネショなんてしないでいうつと思えるでしょ？」

「は、はい・・・」

実際にそんな事をしたら児童虐待だと思いつつも弘夢は首を縦に振った。

「でもまだ不十分ね。この手の子は一度徹底的に恥ずかしい目にあつた方がいいわ」

「では、何かお考えかあるのですか？」

「ええ、これは私自身が一番下の妹のオネショに困って、オシオキとしてした事があるんですけど、たちどころに妹のオネショ癖は直ってしまいましたの」

「まあ、是非お聞かせ下さい」

二人の女性のやりとりを弘夢はオムツを丸出しにしたまま聞いているしか無かった。

「まあ、見てよあの子どうしたのかしら？」

「あらあら、きつとオネショしちゃったのね、可愛そうに」

「でももう随分大きい子よ。それでオシオキされちゃってるのね」

同じ日に旅館に泊まっていた客達は、食堂から見える庭に立たされた弘夢の姿を見て同情し、また笑い合っていた。

「こ、こんなやつてないよ・・・お、お願い・・・だれか・・・たすけて・・・」

広い庭には簡易的に造られた物干し竿。そこには彼が世界地図を描いてしまった濡れた布団が掛けられている。それだけでも彼がオネシヨをしてしまったという事は明らかなのだが、更に弘夢は両手を後ろで括られ、動けないようにして、物干し竿に立ったまま縛り付けられてしまっていたのだ。しかもスカートを捲ったオムツ丸出しの姿だから彼は堪らない。

「まあ、あれってやりすぎじゃない？」
若い女性が曜子に尋ねる。

「私もそう言ったんですけど、日頃から言うことを聞かない子だから、あれくらいが丁度いいんだって引率の先生がおっしゃって・・・」

「そう、それなら仕方ないかもね。でもあの歳でオムツじゃあ死にたいほど恥ずかしいでしょうね」

「ええ、もうすぐあの子の同級生もやってきますし」

曜子の言った通り、すぐに廊下から賑やかな声が聞こえる。

「や、やめて・・・見ないで・・・いやあああっ！！・・・許して！お願いだからあっ！！」

泣き叫ぶ弘夢の声も厚いガラス戸に遮られて聞こえない。朝食をとり食堂に集まった生徒達はある者は驚き、ある者は笑い合った。

「きやははは！あいつ、あんなところでオシオキされてるよ。オムツ丸見えて恥ずかしいっ！」

理香と杏奈が指を指して腹を抱える。

「ねえ、あのお姉ちゃんどうしてオムツしてるの？」

見知らぬ家族連れの小さな女の子までもが不思議そうに首を捻り、まだあどけない声で理香に尋ねた

「あれはね。オネシヨのオシオキをされてるのよ、あなたはもうオネシヨなんてしないでしょ？」

「うん、あたしもうずっと前に治ったよ」

「そうよね。けどあのお姉ちゃんはずっとあなたより大きいのにまだオムツがとれないの。だからああやって、恥ずかしい目にあってオネシヨが治るようになってしまうのよ」

「ふーん。もう大きいのに恥ずかしいね」

「じゃああなたもお姉ちゃんのオネシヨが治るのに協力してあげてくれる？もうちよっと近くによって見てきてあげればいいのよ」

「はい！」

そう返事をして少女はガラス扉に駆け寄る。

「はやくオネショなおるといーねー」

まだ小さな少女にすぐ近くから好奇の視線を浴びせかけられながら、弘夢は恥ずかしいオムツ姿と汚したオネショ布団を晒しているしか無かった。

「も、もう・・・許して・・・こんなの・・・恥ずかしすぎるよおっ・・・」

第七章 替えのオムツはどこにあるの

東京ファンシーランドは入園者数日本一の巨大遊園地だ。当然ながら夏休みの園は大勢の家族連れやカップル、若い女性グループで賑わっていた。

「ねえねえ、次はどれに乗る？」

今その園の中に大学生男子、三谷弘夢は悪夢を見ている気持ちで立っていた。全身女兒向けの洋服に身を包み、肩からはイチゴをかたどったバッグを提げ、スカートの中には女の子用の紙おむつといった信じられない格好でだ。

予定では集合時間まで大人しくしているつもりだったが、周りの環境はそれを許してくれそうも無かった。彼は入園直後から多くの『お姉さん』達に囲まれ、次々とアトラクションを回る羽目になってしまっていたのだ。

「どう、ファンシーランドって楽しいでしょ？」

香澄の問いかけに弘夢は黙って頷く。本当は中学の修学旅行で来たことがあるのだが、彼が△学四年生ということはまだ信じている彼女たちにそんな事を言える筈も無い。

「オムツ濡れたらすぐにいうのよ」

二年生の子がスカートの上から弘夢のお尻を叩いて言う。そのたびに周りの入園客達に聞こえないか弘夢は肝を冷やさなければいけなかった。

「おい、次はあれ乗ろうぜ！」

彩加が声を張り上げた。

「いやよ、あんな怖そうなの」

香澄が眉をしかめる。彩加の指さす先には、立った姿勢のまま空中をぐるぐると回り続ける、大型のブランコのような大型遊具がそびえ立っていた。

「あたしも乗りたいー！」

二年生の子も大きな声で賛同し、香澄はやれやれという表情を浮かべた。

「じゃあいいよ。香澄はここで見ててくれれば」

「ええ、そうさせてもらいます。この子も面倒見てるわね」

一年生の子を隣に座らせ香澄は遊具の脇のベンチに腰掛ける。自分もと言おうとした弘夢だったが、彩加は強引に彼の手を掴んで列に並ばせてしまった。

「ああ、ちょっと・・・」

いよいよ皆の順が回ってきたその時、アルバイトらしい係員が弘夢達に声を掛けた。

「この遊具は身長制限があるのよ。悪いけどお嬢ちゃんみたいに小さな子

は・・・」

そう言って近づいてきた係員の表情が一瞬驚きに変わった。

「あ、あら・・・思ったより大きいのね・・・」

その目は明らかに弘夢に向いている。

「ちよっと、この前に立ってくれる？」

彼女は入り口の脇にある、ファンシーランドのキャラクターを模した身長計を指さした。そこには『僕より小さな子は乗れないよ』と吹き出しが書かれている。

「ええーっ・・・」

弘夢は思わずそう声に出してしまった。事故以来彼がこの世でもっとも嫌いなものは身長測定といっても過言では無かったのだ。

「ほら碧衣ちゃん、係員のお姉さんの言うことを聞きなさい」

彩加にそう言われ渋々弘夢はその前に立つ。彼の身長はぎりぎりそのキャラクターを上回っていた。

「あらごめんなさいね。そんな格好しているから、凄く小さな子に見えちゃったの」

係員は照れ笑いを浮かべて皆を遊具に案内する。

「はい、ベルトを締めて、しっかりと手を離さないようにね」

子供に話すような説明の仕方だったが、今の姿では文句も言えない。弘夢は骨組みだけで出来たゴンドラに小さな体を預けようとした。

「ベルト確認するね・・・あら？」

だがその瞬間係員の動作が止まる。

「あ、あなた・・・△学生よね？」

係員は再度確認した。身長以外にも幼稚園児以下の子供は乗れない決まりになっているのだ。

「も、もちろん・・・ですけど・・・」

本当は大学生だと言ってやりたかったが、弘夢は慥然として聞き返した。

「見て分かりませんか？」

「ごめんね、だって・・・」

係員は弘夢の下半身を指さした。

「あっ！」

弘夢の顔がたちまち赤く染まる。そこにはピンク色のオムツが少しだが顔をのぞかせていた。ベルトの金具の先がスカートに引っかかり、その一部を露出させてしまっていたのだ。

「な、直して・・・」

だが弘夢が言ったその瞬間ブザー音が鳴ってしまった。ゆっくりと彼を乗せたゴンドラは宙に浮いていく。

「と、止めて！このままじゃあ！」

だがいくら叫んでも一度動き出した遊具はどうにもならなかった。止めてと悲鳴をあげたところで、周りには怖がっている風にしか聞こえない。

「や、やだ・・・こんなの・・・」

弘夢達を吊ったゴンドラは地上高く上がっていく、真下には香澄が手を振っているのが見え、遊具は今度は前方向に動き始めた。

「わああーっ！！」

元々この類の乗り物が得意ではない弘夢は悲鳴をあげた。

「こ、こわいよっ！！」

ゴンドラは風を切って回り始める。それにつられ、少しだけしか捲れていなかった彼のスカートは風にそよぐようにだんだんと大きく翻ってしまふ。

「あっ・・・ああっ・・・だめえっ！！」

手でスカートを押さえたかったが、恐怖心から安全バーを握った手を離す事も出来ない。ついに彼はスカートが完全に捲れた状態のまま、その恥ずかしい姿を地上にいる皆に晒してしまっていた。

「みてよ、あの子の穿いているのオムツじゃない？」

「ホントだあ。いい年してまだオムツなのね」

「怖くて失禁したらいけないから乗る前であてたんじゃない？」

「ええっ！じゃああたしもあててみようかなあ」

「馬鹿ね。あたしならオムツするくらいなら裸の方がマシよ」

「ホントね。□学生にもなつてオムツなんて絶対いやよね」

そのオムツを晒しているのが大学生、しかも男の子だなんて想像もせず、地上から女子□学生達は彼の姿を嘲笑しあっていた。

「た、助けて・・・こんなの・・・いやだあっ・・・」

下を見るとカメラを回している母親らしい人影も見える。最近のカメラは性能がいいから、ぼつちりと自分のオムツ姿も記録されているに違いない。あの家族が帰ってからリビングで自分のオムツ姿を見つけたらなんて思うだろう。いい年してオムツをあてて遊園地で遊んでいる僕の姿を見て笑われるに違いない。そんな事を考えると、弘夢は今すぐにでもここから消え去ってしまいたいほどの気分に襲われた。

「うわああああーっ！！！！」

だが遊具はますます高速で回り始める。弘夢の恐怖心と羞恥心が極限まで達してしまったその時……

「……あっ！……あああっ……」

自分でも思わない声がかからこぼれた。

「だ……だめえっ……こ、こんな……いやあ……」

痺れるような恐怖の中、うっすらと股間が湿っていくのが分かる。だが分かっていても止めようが無かった。そう、彼はゴンドラに乗せられたままお漏らしをしてしまっていたのだ。

「や、やだ！やだ！とまって！とまってよおっ！」

まるでオチンチンだけが別の生き物のように勝手にオシッコを漏らしていくかのような感覚。お漏らしなど幼稚園以来したこと無かった彼だったが、どう頑張ってもその勢いは止められなかった。

「あっ……あああっ……ど、どうして！？どうして！？」

だんだんとオムツは重さを増していく。幼児とは違う大人のオシッコの量だからそれも当然だ。

「こ、これ以上……出したら……オムツから漏れちゃう……」

やがて遊具の動きは徐々に緩やかになりその動きを止めていく。幸いな事にそれと同時に弘夢のオシッコもその放出を終えようとしていた。

「お疲れ様でした」

ゴンドラが地上までおり、泣きそうな目をした弘夢のベルトを係員が外す。

「ゴメンね。大丈夫だった？」

「あっ……あうっ！！」

係員と顔を合わせる事が出来ず、弘夢は慌ててその場を立ち去った。

「あっ！走っちゃ危ないわよ！」

その姿を呼び止めようとして係員は諦めた。彼の乗っていたゴンドラの足下に、今できたばかりの染みを数滴発見したからだ。

「あーあ、そんなに怖かったのかよ」

さすがに呆れたように彩加が言った。

「まあまあ、碧衣ちゃんらしくっていいじゃない。折角オムツしてもらってたんだし、役に立って良かったって考えれば？」

皆に囲まれて弘夢は濡れたオムツのまま呆然と立ち尽くしていた。

「しっかしこれじゃあ交換しないといけないよな」

彩加がオシッコを吸い込んでぶっくりと膨れあがったオムツの股間を手の平で

持ち上げるようにして言った。

「いやあっ！」

その振動が男の子の敏感な部分にまで伝わって弘夢は少女のような声を漏らしてしまった。

「でも替えのオムツなんてあったかしら？」

「うーん、どこかで売ってないかな？」

彩加は手に持った園の地図を広げる。

「おっ！ここだったら置いてるかもしれないぞ」

「ホント？そんな場所あったかしら？」

香澄が地図を覗き込む。

「ほら、ここ」

「あつ。ここならいいわね。きつと替えのオムツも用意してあるわ」

「ね、ねえ・・・どこまで行くんだよお・・・」

彩加と香澄に両手を掴まれたまま弘夢は何度目かの情けない声を呟いた。ただでさえオムツをあてられた股間の為に歩きにくいのに、それがたつぷりと漏らしてしまったオシッコでぶつくりと膨らんでいるものだから堪らない。彼はまるで歩き始めたばかりの赤ん坊のように、足を大きく開いたがに股の迪々しい動きで皆に囲まれたまま園内を歩かされていた。

「碧衣ちゃん、もう少しだから頑張ろうね」

だが二年生の女の子にまでそんな風に励まされれば弘夢はもう何も言い返せない。濡れたオムツの冷たさを我慢しながらも彼は歩き続けるしか無かった。

「あつ、見えてきたわよ。あれじゃないかしら？」

香澄が見つめた先には園内でも一際目立つ大きな看板が設置されていた。

「ねえねえ、あれなんて読むの？」

看板に書かれた英語の文字を見て二年生の子が彩加に尋ねる。

「ベビーパーク。そうね、赤ちゃん公園、もしくは赤ちゃんの居場所って感じかしら」

「園でいうと、赤ちゃんコーナーって言ってもいいかもな。ほら、解説読むと『小さなお子様とその保護者様にくつろいで頂ける専用施設です』って書いてあるしさ」

ふーん、と納得した女の子の声と同時に弘夢は背筋に冷たいものが走り抜けるのを感じた。

「ちよ！ちよっと待って！まさか・・・」

「そのまさかよ。だって園内でオムツ売ってるのここだけみたいなんだもん」
「で、でも！」

「いいじゃない。碧衣ちゃんがオムツ濡らしちゃったのは事実なんだし、オムツ買うためにちよつと入れてもらうだけだからさ」

「そ、それは・・・そうだけど・・・」

そうは言っても弘夢には大きな抵抗があった。本物の赤ん坊でも無い自分がオムツを買うためにそんな場所に入るなんて屈辱的にも程があった。

「それともその濡れたオムツのまま集合時間まで我慢する？」

「そ、それは・・・」

「じゃあ仕方ないだろ。ほら、行くぞ」

「あつ、待って！」

彩加と香澄が先頭を切ってベビーパークに入ろうとするその姿を慌てて弘夢は追った。だがその入り口で係の女性に一行は呼び止められてしまう

「あなたたち、ちよつと待ってくれる？」

「えっ？」

「可愛いお客さんね。ここは赤ちゃんとそのママの為の場所なんだけど、あなたたちどんな用事なの？」

まだ二十代前半に見える係の女性はしっかりとした声で彩加達に尋ねた。黒髪に園の黄色い制服が似合ったとても美しい女性だ。

「え、えーつと・・・」

彩加と香澄は顔を見合わせて、それからゆっくりと弘夢の方を見た。

「あ、あのつ。お友達で一人オムツの取れない子がいて、その子の替えのオムツを買いにきたんです。ここって入場無料でしょ？」

「まあ偉いわね。お友達思いなのね」

女性は感心するように言った。そのお友達が弘夢だと言うことには気がついていないようだ。

「でもね残念だけど、ここって保護者同伴じゃないと入る事ができない規則になってるのよ」

「えーっ！」

彩加が不満そうな声を漏らした。

「だ、だったら私達が保護者だよ。実際にオムツ買いに来たんだし、それでもいいでしょ？」

「うーん、規則では保護者の規定は□学生以上って事になってるのよねー。それから肝心のお友達は一緒じゃないの？ここは赤ちゃんとママと一緒に入るっ

ていうのが基本になってるのよ」

係の女性は困った表情を見せた。

「私としては入れてあげたいんだけど、園の規則を勝手に破っちゃお姉さん叱られちゃうし・・・」

これなら入らなくて済むかもしれない。弘夢は少し安心した。

「私達が一緒に入ってあげようか」

だがそんな彼の耳に聞きたくも無い声が飛び込んできた。

「□学生以上ならいいんでしょ。あたし達はその保護者って奴になってあげるよ」

聞き覚えのある、そのいやらしい声の発言者はもちろん例の□学生二人組だった。

「いーよ、あんたらの助けなんか借りたくないし」

きつぱりと言い切った彩加に対し、理香が近づいてきて彼女の肩に手を廻す。

「遠慮しなくてもいいのよ。可愛いお友達のをでしょ」

「そうそう、あんたも自分からお願いしたらどうなの。お友達が困ってるじゃない」

杏奈が同じように弘夢の肩に手を掛けて言った。

「ほら、あなたの為にみんな困ってんじゃない。早く言って見せてよ、理香先輩と杏奈先輩、あたしのママになつて下さい、つてさ。きゃはははっ！」

たまらず弘夢は下を向いてぎゅつとこぶしを握った。係の女性はようやくお漏らしした友達というのが弘夢だと言うことに気がついた。彼女はその重苦しい雰囲気慌てながらこう言った。

「そ、そう。それならみんな一緒に入ってくれていいわよ。ほら、早く入ってオムツ交換してあげて！」

思わず大きな声で言ってしまった女性は自らの口を押さえた。恐らく顔を真っ赤に染めた弘夢を見て、自尊心を傷つけてしまったと思っただろう。

「ご、ごめんなさいね。でも大丈夫よ。最近は大きな子でもオムツしてる子は少なくないし、中にはそんな子用のオムツも沢山売ってるし、大き目のオムツ交換台も用意してあるからね・・・あっ・・・いえっ・・・」

本人はフオローしているつもりだったが、話せば話すほどその言葉は弘夢の胸に突き刺さっていく。だがそんな彼に対し理香が厳しい声で更に追い打ちを掛けた。

「ほらあ、折角お姉さんがいいって言って下さってるでしょ。なら言えるよね、理香ママ、杏奈ママ、赤ちゃんの碧衣のオムツを換える為に一緒にベビーパー

クに入って下さいって」

「そ・・・それは・・・」

「それともいつまでもここで恥かいていたいのか？濡れたオムツのままですとここで我慢する？」

「あ、あの・・・」

係の女性はもういいからと言おうとしたが、理香と弘夢の間に流れる異様な空気にそれを躊躇ってしまった。

「わ、わかり・・・ました・・・」

確かにここで何時間も突っ立っている訳にはいかない。顔を上げれば既に何事かと数人の入園客が遠回しに自分たちを見ているのも感じられた。

しばらくの沈黙の後、仕方なく弘夢は屈辱にまみれた言葉を口にした。

「り、理香・・・ママ・・・あ、杏奈・・・ママ・・・」

ママという言葉が酷く恥ずかしかった。彼は母親の事をそんな風に呼んだ事はないし、お母さんと呼んだ記憶さえ最近は無かったのだ。

「あ、碧衣と・・・一緒に・・・入って・・・下さい・・・」

「省略しないできちんと行ってよ」

「は、はい・・・あの・・・あ、碧衣の・・・交換・・・」

「何を交換するの？」

「オ・・・オ、オ・・・オ・・・オムツです・・・」

「オムツをどうするの？」

「オ・・・オムツを・・・こ、交換・・・」

「だから？」

「こ、交換して・・・ほしいから・・・い、一緒に・・・入って・・・下さい・・・」

「まあいっか」

理香と杏奈は顔を見合わせてそう言った。だがその表情にはまだいやらしい微笑みが残っており、彼女たちのサディスティックさがまだ満足していない事を感ぜさせた。

「ねえ、お姉さん」

理香は振り返ると係の女性に言った。

「ここは本来赤ちゃんと保護者しか入れないんでしょ？」

「え、ええ・・・そうよ・・・」

「だったら、この子は大きいのにどうして入れてくれるの？」

「そ、それは・・・あの・・・」

女性はちらりと碧衣の方を見てから小声で言った。

「あの子、お漏らししちゃってるんですよ。意地悪してしないで早く換えてきてあげたらどう？」

精一杯に気を使った女性の発言だったが、理香はそれを聞いてなにやら首を傾げた。

「あら、お姉さんファンシーランドの係員のくせに仕事がいい加減過ぎるんじゃない？」

「ど、どういう事かしら？」

□学生の少女に仕事がいい加減と言われ、さすがに女性も少し眉を顰めた。

「だってそうでしょ。その子が本当にオムツかどうかとも確かめずに入場させる気なの？そんな事じゃあ誰だってウソつけば入れるじゃない」

「だ、だって・・・」

女性は思わず少女のような言い訳を漏らした。これではどちらが年上か分からない。

「でしょ。そんなお姉さんがお仕事をきちんと出来るように私達が協力してあげるね。だって先生から、園では係員の人たちに迷惑を掛けないようにって言われてるもんね」

理香と杏奈はそう言って頷き合う。

「碧衣ちゃんも当然協力してくれるわね」

不意にそう言われた弘夢は思わず大きく頷いてしまった。理香の言うことにも少しの正しさは感じられたからだ。

「じゃあね、碧衣ちゃん・・・」

だが次に理香の口から出た言葉はとんでも無い事だった

「じゃあ碧衣ちゃん、ここでスカート脱いじやいなさい」

「えっ!?!」

皆が驚いて弘夢の下半身を見る。彼が穿かされているプリーツスカートがそれに反応するかのように微かに揺らめいた。

「えっ、じゃ無いでしょ。それを脱いであなたが本当にオムツの取れない赤ん坊だって証明してくれたら、このお姉さんだってお仕事をきちんと出来るのよ。」

「そ、そんな・・・」

理香の言うことは筋が通っているようでありながら、碧衣の心は全く無視したものだ。

「ほら、遠慮しなくていいのよ。それともオムツが邪魔で脱げないのかしら？」

「そ、そんなこと・・・い、いやだ・・・」

「え！？・・・なんて？」

耳に手を当てる仕草をして理香は弘夢に近づいた。

「お、お前らいい加減に！」

堪りかねた彩加が叫んだ。

「そうです。碧衣ちゃんを虐めるのはいい加減にして下さい・・・」

香澄までもが小さな声で抗議した。だが□学生達は余裕の笑みで二人を振り返った。

「元はと言えば悪いのはこいつだろ」

その言葉に弘夢はドキリとする。理香が言っているのはもちろん彼が男の子だと隠していた事に違いない。

「そ、それは・・・きつと理由が・・・」

彩加は引き下がらなかつたが、理香は笑みを浮かべて言い返した。

「へえっ、じゃあどんな理由か聞いてみようか？大きな声で言ってみせてよ」

彼女は再び弘夢に向き直ると、小声で彼に向かって言った。

「いい加減にしないよ。あんまり駄々こねると夏休み明けたら、あなたの学校に押しかけちゃうよ。学校名も全部知ってるんだからさあ・・・この学校に女の子の振りして塾の合宿に来た迷惑な生徒さんがいますって、先生に言っちゃってもいいの？」

弘夢は震え上がった。もちろん彼女たちの尋ねてくるであろう△学校に彼は通ってなどいないが、本物の碧衣にどんな迷惑がかかってしまうか分からない。

「わ、わかりました・・・」

それは苦渋の決断だった。弘夢は冷静な判断で、今一時の恥を選んだつもりでいた。

「えーっ！」

「ちよつと、碧衣！？」

「そんな奴らの言うこときかなくていいよ！」

事情を知らない皆が口々に言うが、弘夢は死んだつもりでスカートのファスナーに手を掛けた。

「み、みんな・・・ありがと・・・あ、あたし嬉しいけど・・・やっぱり・・・

悪いのは・・・あたしだから・・・」

それは半分は本心だった。何があっても碧衣に迷惑を掛けられないという彼の心はチェック柄のスカートをそのまま地面にストンと落としてしまった。

「きやつ！」

小さな悲鳴をあげて目をふさいだのは係の女性だった。彼女は指の間から弘夢の下半身を確認し、もうどうにも堪らないといった声を出した。

「わ、分かったわ。確認したから！早く行ってオムツ換えてあげなさい！」
その声があまりに大きかったから、入り口付近にいた入園者が皆弘夢の方を振り向いてしまった。

「あら、可愛そうに。大きいのにオムツなのね」

「ねえ、あのお姉ちゃんまだオムツとれてないの？」

ベビーパークから出て行こうとした親子連れがそんな会話を交わすのが耳に聞こえ、弘夢を一層辱めた。

「じゃあお姉さんの許可も出たし、中に入ろうか。赤ちゃんの碧衣？」

彩加達に代わって、今度は理香と杏奈が彼の両手を握って歩き出す。

「大丈夫かな、碧衣・・・」

彩加は弘夢の脱ぎ捨てたスカートを拾い上げると、心配そうにしてその後ろについて行った。

「でもとっても可愛いね、碧衣ちゃんの後ろ姿」

だがそんな二年生の女の子の言葉に彩加は少しだけ苦笑した。廃棄用のテープが目立つぶつくりと膨れあがったお尻は、歩く度にアヒルの様に揺れてまるで母鳥についていくひな鳥のように見えたのだ。

「ね、ねえ、手を離してよおっ・・・」

だが当人の弘夢は堪ったものでは無かった。二人に手を取られているから恥ずかしい股間のオムツを隠すこともできず、ベビーパークの中で□学生の二人は目立って仕方が無いから、当然大きな赤ん坊の彼も人々の注目を浴びることになってしまう。

「ねえ見て、あの子大きいのにオムツ丸出しで恥ずかしくないのかな」

「見た目大きいだけで本当はまだ小さいんじゃない？だって普通幼稚園に上がる頃にはオムツ見せるの嫌がるもんね」

見渡せば確かに幼稚園より上くらいの子はきちんとパンツかスカートを穿いている。いやむしろその年でオムツを穿いている子の方が少ないであろう事を考えると、弘夢は情けなさで胸がぎゅつと縮む思いだった。

逆にベビーパーク内の気楽さから、それより小さな子達は本当にオムツを丸出しのまま思い思いに遊んだり遊ばれたりしている。そんなまだ就学さえもしていない子供達と同じような姿をしてベビーパークを歩かされると、考えられない恥辱に弘夢はあらがうことも出来ずただ耐えているしか無かった。

「替えのオムツどれがいいかしら？」

入り口付近に広がっていた遊び場を抜けて、ようやく弘夢達は売店にたどり着いた。店内にはファンシーランドのキャラクターを使用した沢山のベビーグッズや、市販されている紙オムツが並んでいる。

「あっ！これ可愛いっ！」

理香が手を伸ばして紙オムツの袋を手を取った。『女の子用』と書かれた、オムツ全体がピンク色をしたまるで女児用ショーツのようなオムツだ。

「駄目よこれ。ほら、体重15キロまでって書いてあるじゃん」

「そっかー、碧衣ちゃんにびつたしだと思っただけだな」

杏奈に言われて理香は紙おむつを棚に戻した。二人が『ママごと』を楽しみ始めている恐怖に弘夢は震え上がった。

「さすがにいくら小さいって言っても四年生のサイズじゃあまり選べないね」

「そうね、これか・・・これくらいだけど・・・一体どっちがいいのかしら」

二人は弘夢を余所になにやらひそひそ声で話し始めた。そしてニヤリとした笑みを浮かべると杏奈が大声を出した

「すいませーん！この子のオムツ欲しいんですけどお！」

「はい！」

さすがに教育の行き届いた店員が遠くからすぐにやってくる。どうやらアルパイトらしいその若い店員は弘夢の姿を見てぎょっとした。

「は、はい・・・オムツでしょうか？」

彼女は横目で弘夢を見ながら杏奈に尋ねた。『研修中』という名札を胸に付けた彼女は どう見てもまだ大学生にしか見えない。

「はい、この子のオムツを選んで欲しいんです。これとこれとどっちがいいですか？」

理香はそう言って、スーパービッグと書かれたサイズのオムツをカウンターに置いて見せた。自分と歳の変わらない女の子にオムツを選んでもらうという屈辱に、弘夢はまともに彼女の顔を見ることが出来なかった。

「そ、そうですよね・・・」

店員は戸惑いながらオムツを見比べる。どうやらオムツ売り場の担当でも無く、まだ歳の若い彼女にとってそれは難しい質問だったようだ。

『も・・・もう・・・どっちでもいいから・・・早く選んでよ・・・』

弘夢はひたすら心の中でそう願っていた。

「えっと・・・あ、ああ・・・これなら・・・」

その願いが通じたのか、店員の女の子はすぐにピンク色のパッケージの方を手

の平で指し示した。

「こちらの方が女の子用となります。吸収体の位置が違っていて書かれていますし、そちらの女の子にはこれがびったりだと思います」

まだバイトに慣れないのか、どう見ても自分より年下の少女達にも、迪々しい口調で女の子はそう言って微笑んで見せた。

「そう、ありがとう」

だが理香は思いもかけない行動に出た。

「じゃあ、こつちをもらうわ」

彼女は店員が勧めたのと逆の方、水色をしたパッケージの方を手を取ったのだ。

「えっ？・・・あ、でも・・・それは・・・」

戸惑う店員に理香は答える。

「男の子用だって言うんでしょ。見れば分かるわよ、パッケージに男の子の絵が描かれているもん」

理香の言うとおりそのオムツのパッケージには、一年生くらいの男の子が元気な笑顔を見せていた。大きな子の自尊心を考えての事だろうか、オムツをした下半身は描かれていないが、それがまだオムツの取れない体の大きな男の子用だと言うことは明白だった。

「だ、だったら、こちらの方が・・・」

なおも女の子用を勧める店員に対し、理香は待ちかねたというように店内全てに響く程の大声で言った。

「こつちの男の子用でいいわ。だって、この子女の子に見えるけど、本当は男の子ですから」

「えっ!？」

店員の驚きの声と同時に店中の客が弘夢を注視した。誰だって『女の子に見える男の子』なんて言われれば少しは気にしてしまうものだ。

「あ・・・あ・・・あ・・・そ・・・んな・・・」

あまりの出来事に弘夢は呆然と立ち尽くしか無かった。だがそんな彼を辱めるように更に理香が大声で言う。

「びっくりしたでしょ？でもホントなの、この子このピンク色の可愛らしいオムツの中にオチンチンを隠しちゃってるのよ。さっきはそこからシーッって、いっぱいお漏らししちゃったんだよね」

皆がクスクスと笑って弘夢のオムツ姿を眺めた。

「あ、あ・・・あんまりだよ・・・こ、こんなの酷いよおっ!!」

とうとう涙をこぼしてしまった弘夢を笑しげな表情で見ながら、理香は店員に

向かってにつこりと微笑んでいた。

「ほら、いつまでも泣いていないの」

会計を済ませた理香はそう言っただけで彼を売店から連れ出す。外には店内での騒ぎを不思議そうに眺めていた客達がじろじろと弘夢の方を見ていた。

「ほら、濡れたオムツ換えてあげるから泣き止みなさい」

まるで弘夢の泣いている原因がオムツが気持ち悪いからとでもいう風に言うと、理香は彼を人混みの中に手を引いて連れて行く。

「ちょ、ちよっと、どこに行くんだよ・・・」

そこは沢山ベンチが並んだ休憩場所だった。周りには花壇に植えられた色とりどりの花が咲き誇り、隣のベンチではまだ一歳にもならない赤ん坊が母親にオムツを取り替えられていた。

「じゃあオムツ換えましょうか」

「こ！ここで！？」

「問題ある？となりの赤ちゃんも気持ちよさそうに取り替えてもらってるじゃない？」

そう言っただけで理香は手を振って見せた。赤ん坊はそれを見てキヤツキヤツと嬉しそうに振りをする。

「なんならベビーパークから出て、もっと目立つところで換えてあげてもいいのよ」

「そ、そんな・・・」

「そんなところで交換したらもつといっぱいの人に可愛らしいオチンチン見られちゃうわよね。いや、ひよっとしたら係員の人に叱られちゃうかもしれないわよね。こんなところでオチンチンを出さないで下さいって・・・そうなら碧衣ちゃんの本当のママにも連絡がいくかもよ？」

「う・・・うううう・・・」

そんな風に脅されては弘夢には逆らいようも無かった。彼が抵抗しない事を知ると、理香はゆっくりとオムツの脇に手を伸ばす。

「じゃあサイドのステッチ外すからね」

弘夢が頷くのも待たず、理香は勢いよくそれを破ってしまった。途端に冷たい空気が濡れた股間に伝わり、弘夢は改めてお漏らしをってしまった恥ずかしさを身にしみて感じてしまった。

「じゃあ今度は反対側ね」

だが恥ずかしいのはそれからだった。理香がもう片方のステッチも破ってしま

うと、当然のことながら紙おむつはどきつという音を立てて地面に落ちてしま
い、彼の下半身を丸裸にしまったのだ。

「きゃあつ」

「まあ可愛い」

「本当に男の子だったのね」

悲鳴には聞こえないそんな冷やかし声が口々に聞こえた。気がつけば数十人の
入園客達が取り囲むようにして弘夢のオムツ交換を見物していたのだ。

「い、いやあああつ!!」

彼は慌てて股間を両手で塞いだが、杏奈がその手を無理矢理にそこからはがし
てしまう。

「ほら、四年生にもなってお漏らししてしまう恥ずかしいオチンチンをたっぶ
りとみんなに見てもらいましようね。これに懲りたらもうオネショもお漏らし
もしないでおこうね」

「えっ？四年生？」

「信じられない！四年生にもなっておムツだつてさ！」

「それどころかオネショもだつて聞こえたよ。あれじゃあ周りの同級生達も大
変だろうね」

「でもホントに可愛いオチンチンじゃない。隣で寝ている赤ちゃんの方が大き
かったくらいよ」

彼の素性を知って周りのざわめきはますます大きくなってしまった。だがまだ
本当の年齢を知られていないだけでもマシだと無理に考え、弘夢は碎け散りそ
うになるプライドをなんとか保つてそれに耐えていた。

「じゃあ新しいオムツ穿きましょうね」

たつぷりと包茎ペニスを見知らぬ人たちに観賞された後、ようやく理香は弘夢
の足下に新しいオムツを穿かせていく。あれほど恥ずかしかったオムツが酷く
ありがたいように思えるのが不思議だった。今の彼はただただ恥ずかしい股間
を隠してしまいたい気持ちでいっぱいだった、

「あつ、ちよつと待ってね」

だがそんな彼の心を読み取ったかのように理香はオムツを太ももまで穿かせた
ところで止めてしまう。

「折角だから早くオムツがとれるおまじないもしておきましょうね」

「えっ!!？えっ!!？・・・な、なにっ!!？」

戸惑う弘夢の体を押さえつけ、理香はベンチの上で彼を四つん這いにさせてし
まった。

「動いたら全部ばらすわよ。あんたの学校にも家族にもね」

そうやって耳打ちすると、理香は大きな声で周りの客達に言った。

「みなさん、この子のオムツが早く取れるようにご協力下さい」

その言葉に皆が首を捻る。だが一人の小さな少女が理香の前に歩み出てきた。

「どうすればいいの？お姉ちゃん？」

まだ一年生くらいに見えるその少女は指をしゃぶりながら理香にそう聞いた。

「あたしもね、ちよっと前までオムツだったからそのお姉ちゃん・・・ちがつたっけ、お兄ちゃんのことすごくよくわかるの。だからお兄ちゃんがオムツとれるようにあたしも手伝うよ」

「そう、ありがとうね」

理香はそう言って少女の頭を撫でると、弘夢のお尻に向かって指を指した。

「じゃあこのオムツお兄ちゃんのお尻を叩いてくれるかしら。あなたみたいに小さな子にお尻を叩いてもらったら頭の悪いお兄ちゃんも、ああオムツって恥ずかしい事なんだな、って気付くかもしれないからね」

「ええっ！？・・・そんなのしていいの？」

さすがに女の子は驚くそぶりを見せた。

「うんいいのよ。そうする事でお漏らしお兄ちゃんのおムツが外れるかもしれないから、遠慮しないで思いっきり叩いてあげて」

「うん、分かった！」

少女は屈託無く返事をする、スキップするように弘夢のお尻の前に歩み出た。

「ちよ・・・ちよっと・・・まさか・・・や、やめ・・・」

動くことも出来ず、オムツを穿かされる直前のお尻を沢山の山の人前に晒しながら弘夢は涙混じりの声を上げた。

「こら！オシオキされる子がしゃべっちゃいけません！」

だが少女はお姉さんぶって弘夢にそう言うと、その小さな手を空高く振り上げた。

「オシオキですよ！」

パーンっという音と共に青空に弘夢の悲鳴が響き渡る。それは痛みというには小さすぎるものだったが、恥辱という点から見れば大きすぎるものだった。

「四年生にもなって、オムツにお漏らしだなんてはんせいしなさいっ！」

再び少女は弘夢のお尻に平手打ちをした。大きな体をして一年生の少女にお尻を叩かれる彼の姿を見て皆が苦笑いを浮かべる。中には多少顔を顰めるものもいたが、理香のあまりにも堂々とした態度に次第にその場は弘夢の公開オシオキ場と化していった。

「はい、今度はあたしがオシオキしてあげます！」
先ほどの少女より少しは年長の女の子が手を上げ、理香は満面の笑みで彼女を迎えた。

「ひいっつ!!」

「い、いたあいいっ!!」

「ひぎやあああつ!!」

つられるように何人もの女の子達が弘夢のお尻に真っ赤な痣を付けていった。
一回一回の強さは弱くても、何人もの何十人もの女の子達にぶたれ続けた彼のお尻はあっという間に腫れ上がり、触れるだけでも悲鳴の出そうなそのお尻をまた別の少女が打ち据えていく。

「あぎやあああ!!」

「あひいいいっ・・・い、いたいいっ!!」

「も、もう許してよおっ・・・あいたあああいいっ!!・・・あーん・・・たすけてえっ!!・・・も、もうお漏らしなんてしないよおっ!!」

永遠に続くように思われる屈辱と痛みの中、今朝も千鶴に同じ言葉を言ったことを彼は思い出していた。そして壊れそうになった彼のプライドは、自らの情けなさをとうとう受け入れようとしてしまっていたのだ。

「ねえねえ、貸衣装だつてさ」

ようやくオムツを交換してもらった弘夢は、再び下半身オムツだけの姿でベビーカーを理香達に連れ回されていた。

「へえっ、おもしろそうじゃん。碧衣も可愛い衣装着たいでしょ？」

杏奈に問われた弘夢はもう拒否する様子も見せなかった。彼女たちの恐ろしさを知った彼は、ただただここから早く出たいという思いだけでいっばいだった。

「ねえ、早く戻ろうよ。もうオムツは換えたんだから、スカート穿かせてやっただけいいだろ」

彩加が彼を代弁するように言ったが、二人の口学生達は全く取り合わない

「だから洋服着せてあげるって言うてるんでしょ。気になるなら、あんた達は先に出ていなさいよ」

「う、うん・・・彩加ちゃんごめんなさい・・・あたしは大丈夫だから・・・先に・・・」

もはや理香達から逃れられないなら、せめて恥ずかしい姿を『友達』には見られたくなかった。彼は半ば本気で皆に向かってそう言った。

「碧衣がそう言うんならいいけどさあ・・・」

彩加は不満そうに言つて道の小石を蹴り上げた。

「ほら、あなたもファンシーランドのキャラクターに変身してみませんかって書いてあるわよ。碧衣ちゃんも変身してみたいわよね」

杏奈が有無を言わさない口調で弘夢に聞いた。もはや彼にはそれに逆らう気力など無い事を彼女たちは知っていたのだ。

「いらっしやいませ」

中に入ると、最近公開された映画に出てくるメイドの姿をした女性が皆を出迎えた。

「衣装のご入り用でしょうか？」

「はい、この子なんですけど宜しくお願ひします」

理香が弘夢の背中を押した。

「ほら、自分でお願ひしなさい。可愛いお洋服着せて下さいって」

「えっ!?!?・・・そ、そのっ・・・」

周りには色とりどりの沢山の衣装がハンガーに掛けられている。中にはファンシーランドのキャラクターの衣装や、弘夢が幼い頃に見た覚えのあるアニメ映

画のキャラクターの衣装も見取れた。大学生にもなってこんなコスプレをしないといけないのか。そう思いながらも理香達には逆らえず、弘夢は真っ赤になつて口から絞り出した。

「あ、あのっ・・・あ、あたし・・・可愛い・・・お洋服が・・・着たいの・・・」
「まあ可愛いお嬢ちゃん」

メイド姿の係員は弘夢のオムツ姿に少し動揺しながらもそう言つて笑つた。先ほどみたいに男の子だつて知られるよりはマシだと考えた弘夢だったが、彼に用意された衣装はコスプレなんていう生やさしいものでは無かつたのだつた。

「これが女の子には一番人気なんですよ」

すぐに店員はハンガーから一枚の洋服を取り出す。それは誰もがよく知っているおとぎ話のお姫様をイメージした真っ白いドレスだつた。

「とっても可愛いわね」

杏奈がそれに手を伸ばす。

「生地もサラサラつてして着心地もよさそうよ。真っ白いドレスは女の子の憧れだもんね。どう、碧衣ちゃん？」

だがそのドレスを杏奈から受け取つた弘夢は不意に我に返つた。こんな衣装を自分が着るだなんて想像しただけで顔から火が出る思いだ。

「これって、着たまま園内を歩いていいんですよね」

「もちろんです。五時間まではそのフリーパスで無料で着てもらえるのよ」

その言葉を聞き弘夢は更に震え上がった。理香達は自分をその姿のまま園内に連れ出すに違いない。そうなれば、このベビーパーク内よりさらに大勢の、修学旅行生達や若い女性達にもその姿を見られてしまうのだ。

「そ、それは・・・やだ・・・」

弘夢は無駄と分かつていながらもそう言つた。理香達がそんな自分の意志を認めてくれる筈が無いと思つたのだ。

「そう、残念ね」

だが理香はあつさりと言つたと、彼の手からそのドレスを奪い去つた。

「他には可愛い無いんですか。この子に似合いそうなやつ」

係員は少し悩みながら答える。

「そうですね・・・実はここは基本もつと小さなお子様用ですので・・・お嬢さんのサイズですと・・・」

ひとしきり考えたあと、係員の女性は手を叩いて何か思い出した様子を見せた。

「そうそう、新作のワンピースがあつたと思うわ」

そう言うと彼女は一旦奥に下がり、控え室から真新しいピンク色の衣装を持ち

出してきた。

「これって最新作なんですよ。今度公開される『不思議の国のアリス』の実写映画あるでしょ？その衣装なのよ」

店員は興奮気味にそう話した。

「あっ、あたし知ってるよ。おひとりあいかちゃんがアリスするんでしょ？あたしママといっしょに今度見に行く約束したもん！」

一年生の子が自慢げに大きな声で言った。おひとりあいかというのは今話題の子役で、たしかまだ六歳程度の少女だ。弘夢もその可愛らしいというか、愛くるしい姿はテレビで見た事がある。

「そう、よく知ってるわね」

係員の女性は更に口早に説明した。

「そうなの、この衣装は映画で使用されるものと全く同じ生地と縫製で造られた目玉商品なの。本当は映画が公開されてからの貸し出しになるんだけど、お嬢ちゃんあんまり可愛いから特別に着てもらっていいわ」

「こ・こ・これを・・・僕が・・・」
衣装を手渡され弘夢は後悔をした。これならまだ先ほどのドレスを着ていた方がマシだったと・・・。

中に幾重にもなったペチコートの入った全身優しいピンク色に染められたワンピース、アリスだから当然だがその上に着けるフリルたっぷりのエプロン。驚いたことに、膝上丈のニーソックスと洋服とお揃いの色をしたワンストラップシューズ、おまけに頭に着ける大きなリボンまで揃えられている。

先ほどのドレスも可愛らしかったが、ある意味真っ白で定番だから園にいてもそれほど不自然さは無いだろう。きつとみんなが小さな子のコスプレとして流してくれるに違いない。

だけこのアリスワンピースは違った。ほどよく淡い色遣いは一見見た目は女兒用のお出かけ服にしか見えず、ロング丈のドレスと違ってスカートは膝上丈しかない。ふわふわしたペチコートがスカートを広げるそのシルエットは、着ている者の年齢をより低く見せるだろうし、しかも映画自体が超話題作だからこんな姿で外を歩けば目立って仕方が無い事は確かだった。

「うわぁ、とっても可愛い衣装ねえ」

「こんなお洋服着れるなんて良かったわね碧衣」

だが二人の『ママ』にそう言われれば弘夢にはもうその洋服を拒否することなど出来なかった。目の前では係員の女性もニコニコと微笑んでいるから尚更だ。

「さっ、着替えるのはこっちでどうぞ。小さな淑女さん」

そうやって彼女は弘夢は片隅にある更衣室に押し込んでしまった。

「どう？一人で着れる？」

そう問われた弘夢は戸惑った。只でさえ慣れない女の子の服。しかも手に持ったアリスワンピースは紐の沢山ついたエプロンドレスまで付いている。とても一人でうまく着れる自信は無かったが、正直にそんな事を言えば理香達にどうされてしまうか分からない。

「う、うん・・・大丈夫・・・たぶん・・・」

そう言った弘夢に対して理香が片方の眉を上げた。

「多分？正直に言いなさいよ、一人で着ることが出来ないから手伝ってって」

「い、いや・・・そんなこと・・・」

「ホントに？エプロンの紐もきちんと自分で結べる？」

「そ、それは・・・」

「でしょ。ごめんなさいね、この子いつもこうやってお姉ちゃんぶるんですよ」
理香が白々しくそう話すと、係員の女性は笑って言った。

「大丈夫ですよ、慣れてますから。一人で脱ぐこともできないのに自分で着替えられるって駄々をこねる女の子って多いんですよ」

弘夢の場合はまた事情が違ったのだが、それ以上言い返す事もできずに彼は試着室の中で俯いていた。

「じゃあ、お姉ちゃん・・・いやママが着せてあげましょうね。可愛いお洋服を」

理香はそう言って履いていたスニーカーを片方脱いでしまった。彼女が自分と一緒に試着室に入ろうとしているのは確かだった。だがカーテンを閉められてしまえば二人きりで何をされるかも分からない。そう思った弘夢がもう一度だけ拒否の声を上げようとしたその時だった。

「あら、こんなところにいたのね」

背の高い理香の背中越しに優しい声が響いた。

「千鶴先生！」

振り返った理香が慌てたように叫んだ。千鶴はバスの時とは違い、地味な色のワンピースにエプロンといったまるで保母さんのような私服姿だ。

「どうしてここが？」

杏奈がそう尋ねると千鶴は弘夢の肩からかかったイチゴ型のショルダーバッグに手を伸ばした。

「秘密はね・・・これなの・・・」

「あっ!?!」

理香も彩加達も、そして弘夢が一番驚いた。彼がずっと肩から提げていたバッグにはいわゆるキッズ用の携帯電話が入っていたのだ。

「最近のは性能が良くてね、園内であなたたちがどこにいるか、バスの中のパソコンですぐに分かったのよ」

千鶴はつらつらと説明する。

「それでね、一時間近く前からベビーランドに入ったままほとんど動かないから、先生心配になってちよつと様子を見に来たってわけ」

一息つくと彼女は弘夢の下半身をそつと観察してから言った。

「でも事情は大体分かったわ。碧衣ちゃんがお漏らししちゃったのね」

「は、はい！そうなんです」

少しは罪悪感があったのだろうか、理香は後頭部に手をあてて苦笑いを浮かべて言った。

「それで新しいオムツに取り替えてあげて、今碧衣ちゃんに可愛い衣装を着せてあげようとしてたところなんです。ほら、新作映画と全く同じアリスワンピースなんですよ」

千鶴は弘夢の足下にあるその衣服を見てにこりと笑った。

「まあホントね。いつまでもオムツ丸出しの姿じゃ恥ずかしかったですよ。着るのが大変そうだから先生が手伝ってあげましょうね」

「あ、いや・・・それは・・・あたしが・・・」

取りすがるように手を伸ばした理香を無視するようにして、千鶴はローファアを脱いでしまう。

「ちよつと時間かかるかもしれないけど待っててね」

そう言って千鶴は試着室のカーテンを締め切ってしまった。

「あ、あの・・・」

狭い試着室で二人きりになり、弘夢の心臓は今朝以上に高鳴っていた。無論その理由は、愛しい女の子と密着しそうなほどの距離にいること。そしてそんな女の子にこれから着替えを手伝われるという恥辱感の為に他ならない。

「また漏らしちゃったのね」

何か言おうとした弘夢に対して、千鶴は先に彼の股間に手を伸ばした。

「あっ・・・」

紙オムツの上から半ば勃起しようとしているペニスさをすられ、弘夢はくぐもつた声を漏らす。千鶴はゆつくりとその手を動かした。

「どう？あたらしいオムツって気持ちいいでしょ。濡れたオムツと取り替えて

もらうんだからそれも当然だと思うけど・・・」

千鶴が何を言おうとしているのか弘夢には理解出来なかった。

「え、えっと・・・」

千鶴と二人きりになれるのはこれが最後かもしれない。夏休み明けに学校で会う前に真意を確かめようとした弘夢だったが、その疑問はまたもや千鶴の言葉に打ち消された。

「ねえ三谷くん、わたしのおっぱい見たい？」

「へえっ!？」

思わず変な声がこぼれた。カーテンの向こうから彩加の「どうしたんだよ」という声が聞こえた。

「大丈夫よ、碧衣ちゃんがちよっと恥ずかしがっているだけだから」

千鶴はそう外に向かって答えると、再び弘夢の方を向いた。

「ねえ、見たくない？わたしのって意外と大きいんだよ」

言われなくても彼女をずっと目で追っていた弘夢はそんな事は知っていた。彼はゴクリと唾を飲み込む。

「だったら、まず大人しく着替えてくれるかな。外のみんなにも怪しいって思われるでしょ」

その魔性の微笑みに弘夢は黙って頷いてしまっていた。

「は・・・恥ずかしい・・・よお・・・」

「いいから、いいから。碧衣ちゃんはじっとしてればいいのよ」

わざわざ外に聞こえるような大きな声で、千鶴は弘夢に言い聞かせているような口調で言った。

上着をはぎ取られ、靴下まで脱がされる。オムツ一枚だけの姿を姿見で確認させられた後、ポリウレームのあるワンピースを頭から被せられてしまった。新品だけの真新しい洋服の匂いと一気に体中からまる子供向け素材の柔らかさ。スカートの中のペチコートが太ももにまとわりつき、背中のジッパーを上げられればもう弘夢はその恥ずかしい衣装を一人で脱ぐことも出来なくなってしまう。

「ほら、靴下も履きましようね」

膝上まである真っ白のタイツのようなニーソックス。頭にリボンをつけられれば、誰から見てもおめかしした休日のお出かけといった様子の小さな女の子ができたってしまった。

「ほら鏡を見てごらんなさい。黒髪のアリスっていうのも割と素敵よ」

千鶴に促され弘夢はおそるおそる姿見で自分の姿を確認する。そこには確かに髪の毛こそ短かすぎだが、昨日の朝トイレの中で確認した時よりも更に女の子らしくなっている自分が存在していた。

「ねっ、もうすっかり女の子でしょ」

千鶴はそう言うと、弘夢を背中から抱きしめた。

「約束のご褒美よ・・・見たい?・・・」

「う、うん・・・」

状況も顧みず弘夢はそう言って千鶴の方に振り向く。目の前にはエプロンの上からでも分かる大きな乳房があった。

「弘夢君だからね・・・」

千鶴はそう言ってエプロンを脱ぎ捨てると、背中の中のホックを外して肩からワンピースを脱ぎ去っていく。ぼろりとこぼれるように現れたのは可愛らしい水色のブラに包まれた放漫な乳房だった。

「い、いいの?・・・」

オムツの中でペニスが大きくなっていくのが自分でも分かっていたが、目の前で同級生の乳房を見せつけられては若い男の子としては理性など飛んでしまうのは当然だった。弘夢は自分の姿を忘れて千鶴の胸に手を伸ばす。

「だめっ・・・順番があるでしょ?」

驚いた事にそう言って、千鶴は弘夢の唇に自らの唇を重ねた。

「んっ・・・んんっ・・・」

大胆にも千鶴の舌が彼の口内に侵入してくる。それは弘夢にとってあまりにも衝撃的なファーストキスだった。

「・・・んっ・・・んああっ!・・・ぶふああっ・・・」

舌と舌が絡まり合い、千鶴は自身の唾液を弘夢の中に流し込んでいく。

「・・・んっ!・・・んっ!!!」

弘夢が千鶴のテクニクに一瞬うっとりとしたその瞬間、弘夢の口の中に小さな固形物が押し込まれた。

「んっ!!」

「だめっ・・・飲んで!」

千鶴は舌先でそれを彼の喉の奥に押しやると、彼の唇から糸を引いたまま口づけの終わりを告げた。

「どう?気持ちよかった?」

「う、うん・・・でも・・・今のは?・・・」

「そのうち分かるわ。でももっと気持ちよくなりたいでしょう?」

そう言って千鶴はブラのカップを細い指で掴み、真っ白な乳房を露出させた。綺麗な円形の中心についたピンク色をした突起に弘夢は目を奪われた。

「さわりたい？」

弘夢は小さく首を縦に振る。だが千鶴は怪しげな笑みを浮かべて言った。

「でも。お手々は駄目・・・お口でならいいわ・・・」

「く、口で？」

「そう。お口でならちゅーちゅーって、吸ってもいいのよ。赤ん坊みたいにね・・・」

この期に及んで千鶴が自分を赤ん坊扱いしている事を知った弘夢だったが、火のつけられた男の子としての本能はどうしようも無かった。彼は黙って唇を千鶴の胸元に近づける。

「・・・んっ！」

今度は千鶴の小さな声が試着室に響いた。弘夢は立場も考えず、初体験を迎えた□学生のように迪々しい動きで千鶴の乳首を舐め始めた。

「・・・んっ！！」

だが千鶴がそのままにいる筈も無かった。彼女は右手を弘夢のスカートの裾に延ばし、幾重にもなったペチコートを持ち上げて彼の紙オムツを再び露出させてしまった。

「や、やめ！」

思わず乳首から口を離し、拒否の言葉を言おうとした弘夢だったが、千鶴は左手で彼の後頭部を抱きかかえると、弘夢の顔を自分の乳房に押し当ててしま

う。

「ママのおっぱいから離れちゃだめじゃない」
溶けるような声でそう言うと、千鶴はオムツの上から既に勃起した弘夢のペニスを探るようにして指で摘むようにして言った。

「あらあら、小さいながらも一応は勃起してるのね。でも赤ちゃんがオチンチン大きくしてるなんておかしいから、みんなに見られる前に悪いものは出しておきましょうね」

千鶴は今度は弘夢の耳たぶをそっと舐めると、右手で摘んだペニスに力を込める。

「ひゃうううっ！」

オムツの中でペニスがびくりと動き、弘夢はおかしな声を漏らす。

「ほら、あんまり大きな声で鳴くと外に聞こえちゃうわよ」

更に千鶴はゆっくりと指を動かして彼のペニスに刺激を与えていく。直接では

無いが故にその感覚はじわりじわりと染み込むように弘夢の脳に快感を与えていく。

「・・・んっ・・・んああっ・・・」

ともすれば沸き上がってくる嗚咽のようなあえぎ声を止めようとして、弘夢は再び千鶴の乳房にしゃぶりつく。

「そうよ・・・良い子ね・・・ママのおっぱいたくさん飲んで・・・大きな子に育つよ・・・」

千鶴のそんな声ももう弘夢には届いていなかった。オムツをあてられた股間を、まるでオムツ交換される赤ん坊のように大きく広げ、彼は千鶴の愛撫を完全に受け入れてしまっていた。

「ねえ・・・あたしも・・・弘夢くん的事・・・好きだったんだよ・・・」彼の恍惚とした瞳を確認し、千鶴はそんな告白を始めた。

「いつも教室で私を見ている弘夢君の視線、ずっと感じてたんだ・・・そう、まるで小さな子が迷子になってママを探し求めているようなあの視線をね・・・」

千鶴の台詞は、冷静な状態の弘夢なら否定したかもしれない。だが今の彼は千鶴の豊富な乳房を食り、その暖かな手に下半身を委ねる事に夢中だった。

「それでね・・・いつか、弘夢君を私のものにしたい。うん、恋人じゃなくって、自分のものに・・・妹・・・いや、赤ちゃんにしたいって思うようになってたの・・・変って言われるかもしれないけど、きつとそれは弘夢君が私にそう思わせただよ」

「んんんんんっ!!!」

千鶴は一層強い力で弘夢の股間を握るようにしてもみ上げた。

「それですとチャンスを待っていた私に、思いもしない話が飛び込んできたの。従姉妹の碧衣ちゃんの家庭教師の先生があなただっってね」

「ん!・・・んあっ!!!」

千鶴と碧衣が従姉妹同士?流石に弘夢は驚いた。だがそんな彼の声は千鶴の手つきによってかき消された。

「それからはゴメンね。碧衣ちゃんに頼んで、あなたがこの合宿に参加するようになされたのは私。もちろんその理由は・・・」

「・・・あつ・・・ひいいいっ!!!」

千鶴は弘夢の体を背中から抱きかかえると、彼の足を大股開きにさせ、両手で激しくオムツの上から彼の股間を揺れ動かした。

「だっ・・・だめえっ!!!・・・そんなことしたら・・・出ちゃうっ!!!」

「もちろんそうさせてるのよ。あなたをこの合宿に参加させたその理由は、こうやってあなたに自分が赤ん坊だって自覚させるためなんだもん」

「そ、そんな・・・僕は・・・あ・・・あぁっ!!」

「もう何を言ってもだめよ。こんなにオムツの中で大きくなったオチンチンがその証拠よ。ねっ、気持ちいいでしょ・・・こうやってママに体を預けて全てを任せるのは・・・そう、弘夢君は小さな女の子なの・・・何も心配しなくてオシッコもウンチも、せーえきだっつてオムツの中にゼーンぶ漏らしちゃえばいいのよ・・・」

「で・・・でも・・・ぼく・・・は・・・あぁんっ!!」

「大丈夫。ほら、もう出そうなんじゃない。折角オムツしてるんだもん・・・たっぷりと汚してしまっつていいのよ。そうしたらまたママがオムツ換えてあげますからね」

「や、やだ・・・そんなの・・・はずか・・・で、でも・・・あぁっ!!」

弘夢が絶頂を迎えようとしたその直前、試着室の中のアまりの騒がしさに、彩加がカーテンをすりと開けてしまった。

「あぁぁっ!!だ、だめえっ!!見ないでえっ!!」

アリスワンピースのままオムツを丸出しにし、股間を千鶴に愛撫されている彼を見て、女の子達は悲鳴も上げられずにその姿を凝視するしか無かった。

「あっ!!・・・あぁっ!!・・・だっ!!・・・だめっ!!・・・で・・・でちゃうよおっ!!」

オムツの中で彼なりに精一杯勃起した小さな包茎ペニスに脈動した。やがてその吸収体は本体吸うべきものではない白濁した液体をたっぷりと吸い込んでしまった。

「うっ・・・うえっ・・・うええっ・・・」

オムツの中に射精する瞬間を沢山の少女達に見られてしまった弘夢は、今や完全にプライドを崩壊させて、小さな子供のように泣きじゃくりながら立ち尽くしていた。

「ほらほら、泣かないの。いつまで立っても赤ちゃんだから・・・」

彼をそうさせた張本人である千鶴はすっきりとした表情で、半ば呆然としている彼女の生徒達の前で弘夢を叱りつけた。

「ほら、いつまでも泣いてちやお姉ちゃん達に笑われるわよ」

「うえっ!!・・・うええっ!!・・・だ、だっつてえっ・・・」

それは男子大学生にとってはあまりにも恥辱に満ちた経験だった。だがその恥

辱を経験したばかりの彼に、休むことなく千鶴の仕掛けた罠が作動する。

「あっ……い、いやあっ……ど、どうして……さっき出したばかりなのに……こ、こんなの……だめえっ!!」

彼はそんな意味不明の言葉を叫ぶと内股をしつかりと閉じ、股間に手をあてる。オムツの中にたっぷりと残った精液がペニスに絡みつくがそれどころでは無かった。

「マ、ママ……ママァ!!……ひ、弘夢……オシッコ出ちゃうよおっ!!」
彼が覚えているのはそこまだった。崩れ去っていく自我の中、弘夢は最後に『お兄ちゃん』らしくオシッコが出そうだという報告を『ママ』にしたつもりだったのだ。

「弘夢？」

「それって誰？」

「ひよっとして碧衣ちゃんの本当の名前？」

女の子達が口々に噂しあった。

「そうよ、この子の名前は本当は三谷弘夢君。先生と同じ私立大学に通う男子大学生よ。さあ、おトイレに連れて行ってあげましょうね」

沸き上がった悲鳴は、弘夢が大学生だと知った事が原因か、それとも彼の足下の滴り落ちるオシッコによるものだったかは分からない。だがどちらにしても弘夢はその場で大量のオシッコを漏らしてしまっていた。

「こ、こんなのって……こんなのって……だ、だから……オシッコって言ったのにい!……ママのばかあ!!」

本物の小さな子のように弘夢は千鶴の腹をぼかぼかと叩いた。その足下にはオムツが吸収仕切れなくなったオシッコが水たまりを造っていく。

「ゴメンね。折角オシッコって言ったのにね……でも今度からはもう少し早く言えるように頑張ろうね……」

その場でスカートを捲り上げると、千鶴は本当の母親のようにそう言って彼のオムツを確認する。

「あらあらちよっとオクスリが効きすぎたみたいね。それともオチンチン刺激されすぎてオシッコ溜まっちゃったのかな？」

そんな独白ももう弘夢には聞こえていなかった。

「さあ、オムツ外しましょうね。理香ちゃん、替えのオムツ取ってくれる？」

「あっ、はっ、はいっ!!」

さすがの理香も動転したまま、バツケージから新しいオムツを取り出して千鶴に渡す。

「ありがとう。さあ、これで安心してちゅからね。新しいオムツは気持ちいいでちゅよー」



皆の見守る中、弘夢の濡れたオムツが外される。射精したばかりの液にまみれ、すっかりと縮こまった赤ん坊のような包茎チン

チンを見られながら、たつぷりと時間をかけて弘夢のおむつ交換が千鶴の手に
よって行われたのだった。

第九章 ほんとうのきもち

「おばさん、頼んでおいたものありました？」

夕食を囲みながら千鶴は玲子に尋ねた。玲子は碧衣におかわりのご飯をよそいながら微笑む。

「ええ、使い古しだけどその方が柔らかくていいでしょ。今朝洗濯してペビールームに干しておいたからもう乾いている頃だと思うわ」

「よかった。ありがとうございます」

千鶴も微笑んで頭を下げる。その笑顔は玲子とそっくりだ。

「でも開心ね。今時布だなんて、最近はみんな紙なんでしょ？」

「いえ、居候の身であんまりご迷惑はお掛けできませんから。明日からこの子の分の洗濯も全部私がさせてもらいます」

千鶴はそう言つて、隣のペビールームに座らされた弘夢を見た。

合宿の終了後、彼と千鶴を出迎えた碧衣の説明で弘夢は全ての真実を知った。

二人が従姉妹同士であること、千鶴が彼を自分の物にしたかった事までは試着室の中で聞いた通りだったが、碧衣も又彼を妹として吉野家に迎えたかった事。また、玲子までも巻き込んでその計画が綿密に進められていた事も。

こうして出張しがちの母親と二人きり、半ば一人暮らしの生活を営んでいた彼は表向きは玲子の計らいで吉野家に居候する事になった。同時に千鶴もまた引っ越しを済ませ、新学期を迎えるまでに奇妙な四人の同居生活が開始されたのだった。

「はい、弘夢ちゃん。あーんして」

スプーンに離乳食を掬うと、何度か口でふーふーと冷ましてから千鶴は彼の口にスプーンを持って行く。最初の頃はそれを恥ずかしがって固く口を閉じていた弘夢だったが、それ以外の食べ物には決して与えてもらえない事を知ってからは、上手に千鶴の手で食べる事ができるようになっていた。だが慣れない手つきで千鶴が、時にはわざとその手を滑らせるので弘夢の胸にかけられた涎掛けはいつも彼のこぼした食事で汚れきってしまったっていた。

「んふふ、碧衣の小さい頃を思い出すわね」

「私そんなにこぼさなかったでしょ？」

「そうね、きつと碧衣ちゃんが手のかからない子だったから、ママは弘夢ちゃんが可愛くて仕方ないのよ」

千鶴の言葉に碧衣は一瞬顔を歪めたが、すぐに『姉』としての立場を思い出したようだった。

「そうだね、わたしも弘夢ちゃんの事とっても可愛いって思うよ。ねえ千鶴お姉ちゃん、あたしも食べさせてあげたいな」

碧衣は席を立つと、テーブルから哺乳瓶を取って、弘夢の口に押し入れた。

「ほーら、たつぷりとミルク飲みましようね」

△学四年生の女の子に哺乳瓶でミルクを飲まされる恥ずかしさに弘夢は頬を赤らめた。

「んぐっ・・んぐっ・・んぐっ」

リビングに弘夢がミルクを飲む音が響く。時折唇からこぼれ落ちる白い液体が更に涎掛けを汚していくその様子を、三人の女性達は楽しげに眺めていた。

「んんんっ！」

だが不意に弘夢の表情が少し変化した。

「あら、またオシッコなのかしら？」

「そうね、さつきオムツ換えてからもう一時間たつものね」

「やっぱり！お漏らしお知らせラインの色が黄色に変わっちゃってるわ」

「あはは、弘夢ちゃんてまるでミルク飲み人形みたい！」

碧衣は幼い頃に持っていたお人形を思い出しながら、なおも彼の口の中にミルクを注ぎ入れていた。

「弘夢ちゃんったら本当に赤ちゃんになっちゃったのね」

ベビールームのベッドに弘夢を寝かしつけ、彼を辱めるように千鶴は言った。

「最初の頃はオムツなんて嫌だって泣いて言っていたクセに、最近はようやく自分がオムツがまだ必要な赤ちゃんだって理解できたみたいね」

「そりゃそうだよ。だって千鶴お姉ちゃんったら、真っ昼間の公園や電車の中でせんせい・・弘夢ちゃんにお漏らしさせるんだもん。誰だってあんなにも恥ずかしいならオムツの方がマシだって思えるよ」

「あらそうかしら。だって弘夢君は本当は大学生の男の子なのよ。オムツの方がいいなんてことあるかしら、ねえ？」

千鶴は寝かしつけたままの弘夢に尋ねた。

「ねえ、本当にこんな生活で良かったの？あたしをママとして、碧衣ちゃんを姉として、女の子としてもう一度やり直すって・・・」

弘夢は泣きそうな目で千鶴を見つめ返す。泣きそうなのはオムツが濡れているからだけでは無かった。本当はこんな生活は嫌だと言って逃げ出したかったが、

これまでそれを何度も試みて酷い折檻や辱めをうけた事を思い出していたのだ。
「ねえ、答えてよ。弘夢くんは私の娘として人生をやりなおしたいの？」

千鶴は彼を抱きかかえると、着ていたカットソーを捲り上げて授乳用のブラを外す。そうしてその綺麗な乳房を弘夢の口にあてがった。

「・・・んっ・・・」

反射的に弘夢はその乳房を咥えて、本当の赤ん坊のようにチュウチュウと音を立てて吸い出していく。これはあの日以来千鶴が弘夢の心に植え付けた条件反射的な行動である。

「んふふ、弘夢ちゃんは本当にママのおっぱいが好きなんだね。あーあ、あたしももう少し大きくなったら吸わしてあげるのになー」

碧衣の乳房を吸わされていることを想像し弘夢はまた顔を赤く染めた。

「ねっ気持ちいいでしょ。こんな生活も悪いものじゃないのよ」

何度聞かされたかわからない言葉を千鶴は口にした。だが普段は恥ずかしくて屈辱的で、すぐにでも逃げ出したいと思っている弘夢も、乳首を吸わされながらそんな風に行われるとその決意も冷めていってしまうのだった。

「そう、すこしずつでいいのよ・・・すこしずつ赤ちゃんになってくれれば・・・そうして時間をかけて、ママとの愛を深めていきましようね」

そうやって千鶴は再び彼をベビーベッドに下ろした。

「じゃあそろそろオムツ換えましようか。気持ち悪かったでしょ？」

慣れた手つきで千鶴は弘夢の紙おむつを外していく。遊園地の時と違ってテープ式だから寝転んだままの状態でも取り替えは行いやすい。だが弘夢にとってはその分、前当てを開かされた時の恥ずかしさは半端なものでは無かった。

「相変わらず可愛いオチンチンね」

なぜならいつもそうやって、先にオシッコの残ったままの包茎ペニスと、黄色く汚れきったオムツの中身を同時に二人に確認され、嘲笑されるからだ。

「今日からはね、弘夢ちゃんに新しいオムツをしてもらおうと思うの」

お尻ふきで股間を綺麗にしながら千鶴は囁いた。弘夢の視界に先ほどから気になっていた、天井から吊された沢山の布が目に入ってきた。

「ほらこれ。赤ちゃん用だけど、弘夢ちゃんのお尻ならぎりぎりあてられると思うの。ねっ、可愛いでしょ」

そうやって千鶴が彼に見せたのは、厚手の布でできたパンツのような衣類だった。前面にウサギのイラストの描かれたそれは一見女兒用のショーツだが、前の部分がマジックテープで開けるようになってる。

「いつまでも紙オムツじゃ、オムツ離れも遅いつていうからね。今日からは布

と併用にしようね・・・碧衣ちゃん、物干しにかかっている布オムツをとってくれる？」

「はい、と元気よく返事をして碧衣は何枚かのオムツを手に取る。真っ白い肌触りの良さそうな布にピンク色で動物柄が描かれた女の子向けの布オムツだ」

「ほら見て」

弘夢に確認させるように千鶴はその布を彼の目の前で広げる。

「ここに名前が書いてあるでしょ？」

彼女が指さす先にはたしかにマジックで『よしのあおい』と書かれていた。

「このオムツはね、碧衣ちゃんが保育園で使ってたオムツなんだって。玲子おばさんが大事にとっておいたものなんだけど、役に立って良かったわね」

「や・・・やだ・・・そんな・・・」

さすがに堪らず弘夢の口からそんな声がこぼれる。△学四年生の子が保育園で使っていたお古のオムツを大学生の自分であてられるなんて想像もできない恥辱だった。

「あら、まだ赤ちゃんになりきれないのかな？」

だがそんな弘夢の言葉を聞き、千鶴は優しい口調ながらも恐ろしい台詞を口にする。

「このあいだ言ったわよね。今度大人の言葉を使ったら、赤ちゃんの格好のまま学校に行ってもらうって。大学のお友達に弘夢ちゃんの可愛い姿そんなに見て欲しいんだあ」

弘夢はぶるぶると首を振った。千鶴ならそんな事もやりかねない事も彼はこの数日の経験で知っていたのだ。

「じゃあ大人しくオムツにしましうね。碧衣ちゃん、手伝ってくれるかしら？」

千鶴は慣れない手つきで弘夢の足首を抱えると、オムツカバーと碧衣のお古の布オムツを敷き込んでいく。紙オムツとは全く異なるその感触に弘夢の羞恥心はまたもや蹂躪されていった。

「そうそう。明日は彩加ちゃん達が遊びに来てくれるんだって？」

「うん、そうだよ。弘夢ちゃんに久しぶりに会いたいって香澄ちゃんも言ったし」

合宿の解散時に初めて出会った本物の碧衣と彩加達は、今ではもう親友とも呼べる関係になっていた。

「それは楽しみね。こんなに可愛くなった弘夢ちゃんを見て、みんな驚くでし



一貫性の女子校に顔がきくそうだから、弘夢ちゃんみたいに大きな女の子でもきくと受け入れてくれるわ。保育園を卒業したら今度は幼稚園ね。きつとまだ弘夢ちゃんはオムツがとれてないでしょうけど大丈夫よ。幼稚園の先生に言つて、オムツをしたまま通えるようにしてあげるからね。お友達には笑われちゃうけど仕方無いわよね。馬鹿にされたくなかったら早くオムツ外そうね」弘夢は千鶴の言葉を聞きながら次第に眠りに落ちてゆく。

「幼稚園を卒園したらいよいよ△学校ね。碧衣お姉ちゃんの制服、きちんと取っついてあげるからそれを着て△学校に通うのよ。その頃にはオムツとれていれればいいね。そうしないと△学校に上げてもらえないかもしれないからね」

弘夢は何度か見た碧衣の△学校の制服姿を思い出す。大きな丸襟タイプの可愛らしいセーラー服に紺色の吊りスカート。自分がそれを着て△学校に通うと考えただけで身もだえしてしまう程の恥ずかしさだった。

「卒業したら今度は□学校、そして高校・・・ずっと女子校だから心配しないでいいわよ。そうそう、オチンチンはいつのタイミングでとってしまいましょうか。すぐに取り過ぎてしまってもいいんだけど、□学卒業くらいまでオチンチンのついた女の子として育てるのも楽しいかもしれないわね・・・」

うっとりとした目で千鶴は夢を語るように話し続けた。彼女の語る事が本気だと弘夢は信じたくは無かった。だが薄れゆく意識の中で、もし自分が女の子に生まれていれば、こんな風に安らかに母親の膝で眠れたかもしれないとも彼はほんの少しだけ思い始めていた。

気がつけばいつのまにか碧衣がガラガラを振って自分をあやしてくれている。大好きなママのお膝で抱かれて、大好きなお姉ちゃんにあやしてもらっていると思うと、弘夢はまた自然にオムツを濡らしてしまっていた。

そして彼は今日も屈辱的な未来に怯えながらも、これ以上ないくらい幸福な表情で眠りに落ちていくのだった。